

令和2年度 厚生労働省委託事業

障害者就労における 林業・水産業等と福祉との 連携におけるガイドブック



障害者就労における林業・水産業等との連携推進事業

障害者就労における
林業・水産業等と福祉との
連携におけるガイドブック

CONTENTS

林福・水福とは	05
林業における職域×障害特性マトリクス	06
水産業における職域×障害特性マトリクス	08

Chapter 1

事例集 林業×福祉

国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園 ふぁいと 特性・能力にあわせて作業種を選定 幅広い利用者の方々全員で取り組める仕組みづくりを	12
有限会社フジタ 篠立きのご園 企業からの業務切り出しで豊富な作業量を確保	14
社会福祉法人花工房福祉会 里山整備利用促進協議会へ加盟し循環型林業を目指して、地域住民と協働で実施	16
社会福祉法人松明会 県の農福連携推進センターからの紹介で林業に着手 作業を利用者の特性に合わせて分解して実施	18
社会福祉法人さかき会 みらいコンパニー 活用が困難だったものをとことん活用 困難な状況を販売機会に変える発想の転換	20
社会福祉法人おぶすま福祉会 飯能事業所 木が利用者さんの力を引き出してくれる! 製品に活かされる高い技術の背景には丁寧な個別支援が	22
社会福祉法人大台町社会福祉協議会 ジグソー工房 環境保全を通して地域が一体になる取り組み 木を育て、森を再生する活動	24
社会福祉法人吉備の里 希望 岡山県産ヒノキにさらなる付加価値を! コロナ禍で生み出した感染予防グッズで日本中に安心を届ける	26
合同会社就労さぼーと 就労さぼーと岐阜 企業と協働で事業所を設立 高単価かつ豊富な作業量で安定した給与原資を確保	28
特定非営利活動法人じゅ〜く プラスワーク(就B) ローカルベンチャーのものづくりを支える! 事業創出の“マスト”パートナー	30
社会福祉法人つつじ 生活介護事業所コスモス 多様なネットワークの中から、作業種の豊富さと工賃原資を確保するために新規事業に着手	32

Chapter 2

事例集 水産業×福祉

株式会社ALLPLUSぶらす 地元志摩市の名産品を県外・海外に流通させたい! 立ち上げたばかりの事業所の挑戦は東南アジアの高級流通へ	36
社会福祉法人旭川荘 いんべ通園センター 地元根付いた地場産業をサポート! 開所当時からの基盤業務として牡蠣の養殖を支援	38
社会福祉法人アストラ会 atワークおさふね 取引先増加の背景には信頼を勝ち取るための丁寧な作業 夢は地域全体の取り組みとすること	40

特定非営利活動法人にじのかけ橋 ワンルーチェ 地元の名産の掛け合わせ! 付加価値をもったブランド創出で工賃アップを実践……………	42
株式会社LABwel +lpppo! 地域の産業を守りたい! 文化の継承のためにも地場産業との連携を進めていきたい……………	44
特定非営利活動法人楽笑 日中支援センター八兵衛 水福×教育連携の新しいカタチ! 地場産業の「干物づくり」は新たなステージへ……………	46
NPO法人さかえ ピアさかえ 本物の真珠が入っているガチャガチャ!? 失敗が許されない完全品質を担保するのは利用者の職人技……………	48
社会福祉法人中国新聞社会事業団 ちゅうげい 地域ならではの資源を活用した連携! ブランド価値の高い広島産牡蠣の生産を支える……………	50
特定非営利活動法人じゅ〜く プラスワーク 「森のうなぎ」(!?)の育成・加工をお手伝い 地域経済循環の担い手として……………	52
特定非営利活動法人Re-Live いにしき 地元漁師との協働で実施! 漁師にも事業所にも高付加価値なモデルで事業を創造!!……………	54
特定非営利活動法人ふくし・みらい研究会 ファイト 地元漁業者の高齢化・後継者不足を就労支援事業所で解消!……………	56

Chapter 3

事例集 その他業種×福祉

社会福祉法人ゆうゆう 渋谷ダブルツールカフェ北海道医療大学 お互いの困り感とできることをマッチさせ 大学内にたくさんある仕事を障害のある方が実施していく……………	60
社会福祉法人愛宕福祉会 デイアクティビティセンターはろはろ 行政・企業・農業・製造小売業…コロナ禍だからこそ、地域と積極的に連携を!……………	62
社会福祉法人月山福祉会 作業所月山 自主事業への飽くなきこだわりは 農畜産事業の展開へ……………	64
社会福祉法人美原の郷福祉会 ワークセンターつつじ 日本に眠る都市鉱山をマイスターと共に掘り起こせ!……………	66
社会福祉法人ゆうかり ゆうかり学園 ご当地で鹿兒島黒豚を育てる 畜産～食肉加工～卸・小売りの六次産業化に取り組む……………	68
特定非営利活動法人障害者の地域生活を支援する会 サポートスクエアぱおぱお 繋がりが繋がりを生む 「想い」が重なり、事業が広がる……………	70
社会福祉法人はるにれの里 とれたってマルシェ きっかけは思いを込めた一本の営業メール 熱心な生育指導と度重なる試験栽培で完全無農薬の生薬栽培に成功……………	72
株式会社アクア 菰野辻農場 徹底した品質管理とスペシャルニーズにこたえる為の低カリウム野菜の開発……………	74

まとめ……………76

DL……………77

林福・水福とは？

- 農福連携は、'14年に農林水産省が「農山漁村振興交付金」をつくった頃から機運が高まり、賃金・工賃向上の取り組みにおいては、ある一定以上の成果を残してきています。
- '19年6月には、農福連携等推進会議が開催され、農福連携等推進ビジョンが設定されました。この中で、今後の「農」の広がりとして、林業や水産業等向け障害者就労モデル事業が期待されています。
- 林業・水産業においては、担い手の人材不足は深刻な問題です。下表は、各業界への就業人口と新規就業者を示しています。GDPでは林業・水産業とも微増していますが、就業人口の減少と、新規就業者の伸び悩み傾向が見受けられます。
- 障害のある方、ならびに障害福祉事業所が労働力提供や事業承継といった喫緊の課題への対応すること、また発展的には六次産業化まで見据えたまちづくりの協創等で連携する意義は深いと考えられます。

【農林水産業における就業人口・新規就業者の変化】

	農業	林業	水産業	単位	備考
GDP	5.70	0.23	0.86	兆円	内閣府「国民経済計算」(H30)
(伸び)	2.1%	5.5%	4.1%		
就業人口	168	4.5	15.2	万人	総務省「国勢調査」(H27年)
(伸び)	-4.1%	-11.3%	-16.2%		
新規就業者	5.60	0.30	0.19	万人	林野庁、水産庁調べ
(伸び)	0.3%	-4.2%	-1.4%		

林業における職域×障害特性マトリクス

これは、林業の一次産業、二次産業の職域と障害特性のマトリクス表です。林業は特に大型重機を利用することが多く、その取扱い自体は本当に難しく、危険を伴います。

しかしながら、『簡単な機械を使う』点については、携わることができる利用者数も多いと思われ、『危険察知能力がある』ことが重要なカギです。

なお、『育苗』については、ほぼ農業と同じと考えられますので、取り組みやすい分野だと思います。

林業	業種	職域	特性			
			知的系		精神系	
			長時間耐久	ルーティン	ノルマがない	基準が曖昧
1次	伐採	チェーンソー				
		プロセッサ				
	下刈り	刈り払い機			○	○
	枝打ち	手のこ	○	○	○	○
	作業道開設	重機				
	育苗	土入れ	○	○	○	○
		苗植え	○	○	○	○
		裸苗の収穫	○	○	○	○
2次	製材	製材機				
		サン積	○	○	○	○
	乾燥	乾燥機				
		節埋め	○	○	○	
	モルダー	モルダー機				
	サンダー	サンダー機	○	○		
	各種2次加工	床板シート貼付	○	○	○	○
	検品・梱包	補修				

特性					職域	業種	林業	
精神・発達共有		発達系						
一人で完結	PC系	基準明確	丁寧	計数				
					チェーンソー	伐採	1次	
					プロセッサ			
○					刈り払い機	下刈り		
○		○	○		手のこ	枝打ち		
					重機	作業道開設		
○					土入れ	育苗		
○					苗植え			
○					裸苗の収穫			
					製材機	製材		2次
○				○	サン積			
					乾燥機	乾燥		
		◎	◎		節埋め			
					モルダー機	モルダー		
		○	○		サンダー機	サンダー		
○					床板シート貼付	各種2次加工		
				○	補修	検品・梱包		

水産業における職域×障害特性マトリクス

これは、水産業の一次産業、二次産業の職域と障害特性のマトリクス表です。水産業は、船に乗る時間の長さ、ということが制約としてあり、また、少人数での舟作業では、相当多能工を要求されるため、難易度は高いです。

水産業	業種	職域	特性			
			知的系		精神系	
			長時間耐久	ルーティン	ノルマがない	基準が曖昧
1次 (漁師)	舟(天然:巻き網・底引き)	作業員 (網上げ・選別)	○	○		
	舟(天然:定置網)		○	○		
	舟(天然:少人数)	多能工で難				
	舟(海藻・磯まわり)	密漁等権利関係難				
	舟(養殖:魚)	作業員 (網上げ・選別)	○	○		
	舟(養殖:貝・海藻)		○	○		
	陸上養殖(魚)	安全性高い		○	○	○
	陸上養殖(魚以外)			○	○	○
	陸作業	水揚げ手伝い	○			
		選別				○
		箱詰め				
		める				
		捌く				
		網外し		○		
		網掃除・直し				
		舟・漁具掃除				
海藻一次加工			○			
貝磨き・仕分			○			
貝剥き		○				
運搬						
2次 (水産業)	市場・仲買人	水揚げ手伝い	○			
		選別				○
		箱詰め				
		める				
		捌く				
		運搬				
		伝票処理				
	水産加工	加工場での処理 (各種ライン作業)	○	○	○	○

しかしながら、『陸上養殖』や『陸作業』と言われる、舟以降の作業については、食品加工とほぼ同等であるため、関われる部分が多いです。なお、『海藻・貝』については、鮮魚よりは比較的作業がしやすい項目が多いです。

特性					職域	業種	水産業
精神・発達共有		発達系					
一人で完結	PC系	基準明確	丁寧	計数			
					作業員 (網上げ・選別)	舟(天然:巻き網・底引き) 舟(天然:定置網)	1次 (漁師)
					多能工で難	舟(天然:少人数)	
					密漁等権利関係難	舟(海藻・磯まわり)	
					作業員 (網上げ・選別)	舟(養殖:魚) 舟(養殖:貝・海藻)	
					安全性高い	陸上養殖(魚) 陸上養殖(魚以外)	
		○			水揚げ手伝い	陸作業	
					選別		
			○		箱詰め		
					める		
			○		捌く		
○					網外し		
○		○	○		網掃除・直し		
○		○	○		舟・漁具掃除		
○		○	○		海藻一次加工		
○		○	○		貝磨き・仕分		
			○		貝剥き		
					運搬		
		○			水揚げ手伝い	市場・仲買人	2次 (水産業)
					選別		
			○		箱詰め		
					める		
			○		捌く		
					運搬		
				○	伝票処理		
○					加工場での処理 (各種ライン作業)	水産加工	

事例集（林業×福祉）

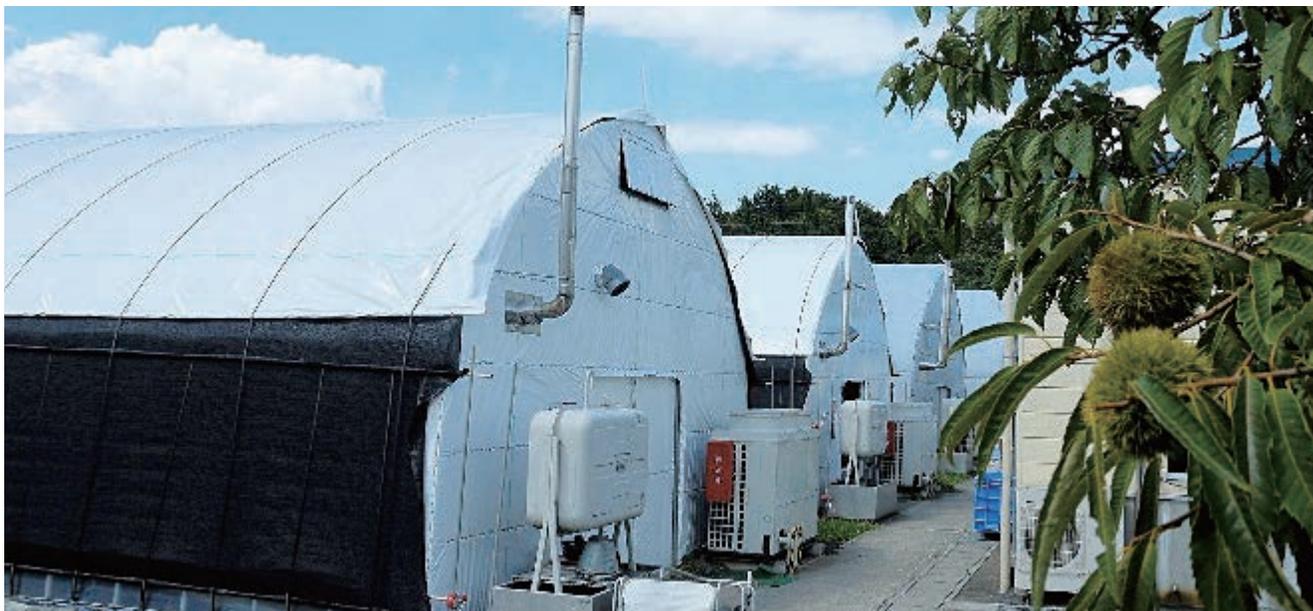
林業×福祉

森産業株式会社

群馬県桐生市西久方町1-2-23

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 ふあいと

群馬県高崎市寺尾町2120番地2



特性・能力にあわせて作業種を選定 幅広い利用者の方々全員で取り組める仕組みづくりを

しいたけの名産地である群馬県において、昭和46年に設立された国立のぞみの園では、開設時から、しいたけの生産に取り組んでいます。当初は原木しいたけからスタートさせ、入所利用者の日中活動（授産作業）として取り組んでいました。しいたけ作業は農作業の一部であり、秋口に収穫を終えると、他の作業（根菜・葉物）に取り組んでいました。

しかしながら、入所利用者の高齢化に伴い、原木は重く、運搬等は相当な重労働であり、他の方法を検討した際、きのこの種を販売している森産業の担当者より、菌床による栽培への切り替えを提案され、現在に至っています。

使用しているビニールハウスは4棟あり、通年で「しいたけ」を栽培しています。品種は通年栽培が可能な品種（XR-1）と、秋から収穫が始まる品種（富富）の2品種を栽培し、夏には「きくらげ」を取り入れています。これらの設備導入から育成まで、森産業の方の指導を受け進めてきました。

月に1回程度の技術指導をはじめ、病気やかびの発生等の緊急時にはその都度電話で指導を受け、年に1回の勉強会には職員が参加して、しいたけ育成のノウハウを積み重ねています。



連携の概要

- ① 特性にあわせた
職域提供
- ② 近隣有名店への
販路拡大

利用者数は17名、障害の区分も幅広く、重度の方も多くいます。しかし、菌床栽培には、菌床づくりから、殺菌、接種、運搬、培養、徐袋、洗浄、収穫、浸水、仕分け、計量、納品、清掃・・・と数多くの作業種があるため、利用者の特性に応じて、仕事を提供することができます。

現在は年間、菌床2.5kg玉を4万5千個（内きくらげ3千個）管理しており、売上高は約1,880万円と大規模な運営となっています。

販路も、職員が営業に赴き、地元スーパーの地場産コーナーで販売してもらえることになりました。これを基盤として、初めは、1店舗からの販売実績をもとに横展開し、現在は高崎市内10店舗のスーパーに、毎日50～60kgのしいたけを卸し、年間約20t販売しています。

また、有名百貨店の地下食品売り場や、関東の有名焼き肉店にも納入しており、利用者も支援者も誇れる実績と販売先を持っています。

連携の課題とその対応

収穫の安定性確保

しいたけ栽培を通年継続するためには、毎日安定的な収量を確保する必要があるため、収穫量に波が出てしまうことは、健全な経営を行う上で常に課題となります。その為、病気やカビの発生といった不測の事態にも対応できるように、森産業と連携し、指導を受けながら収穫の安定を図っています。

組織としての課題

しいたけ栽培は、温度・湿度管理が必須となり、常に気を配り点検・調整する必要があります。それを継続するためには、経験の蓄積が必要になりますが、異動の伴う職場ですので、業務の引き継ぎが課題となります。その為、職員の異動に伴い森産業の指導を受ける事も引き継いでいます。



しいたけ栽培の様子



収穫されたしいたけ

今後の展望

関東営業所
吉田雅之氏

菌床しいたけ栽培は、「軽作業が主体で危険性が少ない」「ハウスで栽培するので、天候に左右されず快適に作業ができる」「通年栽培が可能で、一定した作業量と収益が見込める」「初期投資が比較的少額で、広い土地を必要としない」という点で福祉と相性が良く、様々な施設で採用いただいております。

弊社は今後とも、経営のお役に立つ優良品質や省力化機器の開発、きめ細やかな生産指導で、のぞみの園様をはじめとする生産者の皆様をサポートしていきたいと考えております。

国立のぞみの園
新井邦彦氏



しいたけ栽培は様々な工程があることで、特性に合わせた活動を提供できる点はとても良い活動であると思います。特に、露地栽培とは違いビニールハウスで通年栽培が可能である点が魅力ですが、それでも、栽培には菌床の水分量等の影響で、その収穫量が影響を受けます。その為、毎日安定した収穫量を確保し、活動提供することが課題となっています。これからも、しいたけの安定的な収穫量確保に努め、利用者に安定した仕事(活動)を提供し、障害者の地域生活を営むことができるための支援の一端を担える事業所を目指していきたいと思っています。



支援区分に関係なく、特性・能力にあわせた仕事の提供

比較的軽度かつ高齢な利用者に対し、好きそうなところ・得意そうなところを見つけ、作業ができるように支援ができており、その結果、ここまでの収量を確保出来ていると思われます。そのことは支援力の高さがあるからこそ実現できていると改めて感じました。

林業×福祉

企業による 就労継続B型事業所の設立

有限会社フジタ 篠立きのご園

三重県いなべ市藤原町篠立舞谷3390-115



企業からの業務切り出しで豊富な作業量を確保

有限会社フジタは椎茸栽培を実施する民間企業でしたが、起業当初から働き手として精神障害者や地域の引きこもりの若者を積極的に雇用していました。そんな中、行政からの勧めもあり就労継続支援B型事業所を設立、主に精神障害者が中心に椎茸栽培の多岐にわたる業務に従事しています。

いなべ市のバックアップのもと、12万菌床/年の栽培を実施しています。菌床椎茸栽培は施設内作業の為、季節や天候に左右されず一定の作業量が確保されること、菌床製造・収穫・選別・出荷作業と多くの作業種があり、利用者それぞれの特性に応じ

た作業を提供できることがメリットです。

また、12万菌床/年（現在栽培ハウスを増設しており、数年内に30万菌床/年まで増産予定）の栽培を実施している為、1つの作業にしか従事できない利用者にも十分な作業量を確保することが可能となっています。

椎茸栽培に関する様々な作業はB型事業所の利用者・職員と有限会社フジタの従業員が協力して実施しているため、利用者の「働く」意識の向上にもつながっています。

連携の概要


Point!

- ① 椎茸栽培企業からの業務切り出しで豊富な作業量
- ② 安定した生産量と充実した販路

母体は30年以上菌床椎茸栽培を実施してきたノウハウを有している為、年間を通して安定した生産量と販路を確保しており、豊富な作業量からそれぞれの利用者の特性・個性にマッチした業務を切り出し提供しています。また、行政からのバックアップも手厚く、現在の施設はいなべ市が菌床椎茸栽培用に建設した施設を指定管理事業者として受託し、運営しています。また、菌床自体を自社で内製化しているため、原価率も大幅に下げることができています。

販路に関しても、中部地方を中心に展開するスーパーや大手スーパー等数多く確保しており、安定した経営をすることができています。

連携の課題とその対応

生産性の向上

収穫・選別など定型化することが難しい作業もある為、従事することが出来ない利用者や生産性がなかなか上がらない利用者もいます。作業場所の構造化や作業マニュアル、治具等を導入していますが、全ての作業量をB型事業所で賄うことは出来ていません。

職域開発

椎茸栽培には菌床製造・栽培管理・収穫・選別・出荷と様々な作業がありますが、現在多くの利用者は出荷作業に従事しています。作業自体は決められた工程ですが、1本ずつ違った形をしている椎茸をどう扱うかは都度判断が必要となる為、利用者が従事していくことが難しいのが現状です。

菌床椎茸栽培ハウス



収穫作業



商品



採れたての椎茸

今後の展望

藤田所長



今後、出荷作業以外にも利用者が従事していくことが出来るような支援方法を確立し、職域を広げていきたいと考えています。また、作業量は1事業所だけではこなせきれない量がある為、他事業所との連携等も実施していきたいと考えています。



企業からの豊富な業務切り出し

菌床椎茸栽培を実施する事業所は多く見られますが、安定した生産量・販路の確保が難しいのが現状です。この事例では椎茸栽培を実施している企業がB型事業所を立ち上げ、利用者の特性・個性とうまくマッチさせつつ十分な作業量を確保しています。また、大規模生産を可能とする設備も行政との連携で確保し、大手スーパーと取引が可能な品質・量を確保しています。

林業×福祉

あさかわの里山と森を守る会

長野県長野市

社会福祉法人 花工房福祉会

長野県長野市篠ノ井布施高田823-2



里山整備利用促進協議会へ加盟し 循環型林業を目指して、地域住民と協働で実施

炭房ゆるくらはH26年4月に法人内事業所エコーンファミリーから林業部門だけを独立させる形で就労継続支援B型事業所として開設しました。

エコーンファミリー時代から、職員のネットワークより竹林を伐採し、炭焼きを行い、その炭を他事業所と連携し石鹼の製造販売などにつなげてきました。独立を機に里山整備利用促進協議会に加盟し、長野県の森林税活用事業を活用しつつ、地域住民とともに放置された雑木林や竹林を伐採、炭への加工や薪として薪ストーブ店やログハウスメーカー、個人宅への販売を行っています。

高齢化に伴い、山主が手入れできなくなった雑木林や竹林を地元住民とともに整備し、切り出した材を買取るというモデルを導入することで、山主・地域住民・利用者ともに利益が出る形となっています。

炭の製造には、伐採・運搬・窯での燃焼など大変な労力と時間を要しますが、それぞれ利用者の特性と作業をマッチングして実施しています。

すべての作業を障害福祉事業所で実施してしまうのではなく、伐採は地域住民が担い、運搬を利用者が実施する等、地域の中で多くの方を巻き込みながら循環型林業を構築しています。

連携の概要


Point!

① 里山整備利用促進協議会加入で
地域と協働

② 県の森林税を活用

もともと地域住民で組織されていた里山整備利用促進協議会に1年間ほど丁寧に説明を重ねることで加盟、協議会に加盟することで県の森林税を活用した事業も実施できるようになりました。また、協議会に加盟することで、それまで伐採する雑木林・竹林も法人職員が所有している箇所だけだったものが、地域に住む山主からの依頼を受けて伐採・加工が可能になりました。

高齢化に伴い、手入れされなくなった雑木林や竹林を地域住民とともに伐採することで、山主にとってもメリットが大きく、伐採できる山が増加しました。また、どうしても利用者が従事できない資機材を使つての作業は地域住民が担い、伐採した木材を法人が買取ることとし、地域住民にもメリットがある仕組みを構築することが出来ました。

連携の課題とその対応

地域住民への障害理解促進

地域住民は障がい者のことを知らず、当初は警戒されていました。一緒に仕事をするようになることで、『障害者もしっかり仕事ができるんだ』という理解が進んでいきました。

従事できる業務が少ない

林業には重機を使わないと出来ない仕事が多くあり、どうしても利用者が従事できない業務もあります。そこを職員が担当していくのではなく地域住民の方々にお願いすることで協働出来るようになっていきます。プロでなければ出来ない業務をプロにお願いすることで循環型林業になっています。



山から薪を切り出す作業



土馬で薪割り作業



炭焼き作業

今後の展望

あさかわの里山と森を守る会
会長 鶴田敏光氏



あさかわの里山と森を守る会は、手つかずで荒れてしまった山の雑木を伐採し、地域の里山を守る活動をしています。大きくなりすぎた木材を伐採することで、次の世代の木が育ち山が良くなります。伐採した木材は、社会福祉法人花工房さんの薪の材料として提供しています。あさかわの里山と森を守る会と、花工房が協力して、山の手入れをし循環型林業の手助けをしています。

炭房ゆるくら
所長 今井広樹氏



山を測量し、計画的に間伐することで未来にきれいに手入れされた里山を保全していきたいと考えています。その過程で良質な材料を確保し、今はすべての材木を薪として販売してしまっていますが、今後は良質な木は材木として販売できるようにしていきたいです。



地域を巻き込んだ事業設計

すべての取り組みを事業所のみで完結させてしまうのではなく、地域住民を巻き込んで実施することで、事業を拡大させることが出来た事例です。事業開始当初は、障害への理解など、困難なこともあったそうですが、地域住民と一緒に仕事をする中で協力してくれる方々も増えていきました。また、事業自体が地域の困りごとを解決することになっていることも地域住民の協力を得ることが出来た要因です。

林業×福祉

北庄内森林組合

山形県酒田市飛鳥大林547-1

社会福祉法人 松明会

山形県酒田市武田字下川原201-5



県の農福連携推進センターからの紹介で林業に着手 作業を利用者の特性に合わせて分解して実施

障害福祉サービス事業所いっぽは母体である入所施設を利用される方たちの働く場として開所されました。比較的重度の利用者が多い中、少しでも工賃を上げていく取組みを続け、今まで、木工クラフト商品の製造販売や、山野草鉢植えの販売等を実施してきました。

昨年度、山形県農福連携推進センターの推進員からの紹介を受け、森林組合での黒松の苗植替え作業を施設外就労として開始しました。

黒松苗植替え作業は、7月から9月の梅雨時期や夏の暑い時期に行います。ハウスから植替え小屋への苗の搬出や育成状況を確認する細かな作業となる為、希望される利用者を募り、

丁寧にトライアルを繰り返した結果、初年度は2名、今年度は3名の方が従事できるようになっています。森林組合での施設外就労が順調に進んだことをきっかけに、農福連携推進員からJAでの施設外就労（ネギ畑除草作業・庄内柿選別作業）を次々と紹介してもらうことが出来るようになりました。

施設外就労を獲得したおかげで、室内作業が良い利用者は施設の中で、外での作業が良い利用者や一般就労に向けた経験を重ねていきたい利用者は施設外就労に従事するという、利用者のニーズ・特性に合わせた業務を揃えることが出来るようになりました。

連携の概要


Point!

- ① 行政が実施している仕組みを活用
- ② 作業工程を分解、利用者とマッチング

県が力を入れている農福連携事業を活用し、積極的に農福連携推進員とコンタクトをとった結果、森林組合での業務受託に成功しました。

林業は危険を伴う作業が多く、障害福祉事業所が担える作業は少ないと思われがちですが、農福連携推進員が森林組合内での業務を切り出し、マッチングしてくれたことが大きなポイントです。また、森林組合職員も障害に対して理解を示してくれ、多大な配慮をいただいていること、加えて施設外就労という形で支援者が必ず同行している事も継続していける大きな要素となっています。

比較的危険を伴わない作業ではありますが、夏場の屋外作業や細かな作業もある為、丁寧に利用者の希望を聞き、トライアルを実施、それぞれの利用者の得意なこと、出来る事に合わせて作業を分解し役割分担をすることで生産性も担保出来ています。

連携の課題とその対応

業務の切り出し

ポットに植えられた黒松の苗を生育状況に合わせて新たなポットに移し替える作業の為、生育状況の判断や、ポットのスリットに位置を合わせる等どうしても従事できない利用者がいたため、作業を分解し、判断・入れ替え・運搬に作業工程を分解し役割を分担することで実施可能となりました。

施設外就労先の障害受容

危険を伴う業務が多い林業において、障害者が実施できる作業が少ないと思われる事や障害特性への理解が進んでいない事も多い。今回は森林組合職員の障害への理解が大きく苦労はなかったが、施設外就労先への障害に対する理解を促す取組みは必要になってくる。



黒松の植替え作業



木エクラフト製品



山野草のポッド

今後の展望

北庄内森林組合
総務課長 小林信昭氏

何よりも利用者の方の一生懸命作業に当たっている姿に感銘を受けました。同時に支援者の方の、丁寧な指導があって実現するものと考えております。育苗の管理作業の中でも、熟練を必要とする選別作業をお手伝いいただいておりますが、皆さんのやる気が我々をその気にさせているものと考えます。今年度は新しい作業種も作業していただきましたが、今後も作業の熟練度をはかりながら、作業種の幅を広げられるよう考えております。

管理者兼サービス管理責任者
兵田 斉氏



林福連携・農福連携で今後の就労支援事業所としての可能性を大きく感じました。現在は施設外就労という形で実施していますが、従事できる利用者に限りがある為、試験的にニンニクの栽培を開始しております。今後は、ニンニクの作付面積を増やすと共に、黒ニンニク加工の試作などを行い、自主製品として事業を拡大していければと考えています。また、林福連携事業に関しても、従事できる利用者を増やしていくことが出来ればと考えています。



行政との連携からさらに可能性を広げた好事例

行政が積極的に取り組んでいる農福連携事業を活用し、新たな業務を獲得した好事例です。

また、それぞれの利用者が作業に従事していくことが出来るよう、作業を細分化し特性とうまくマッチングさせることで生産性を高めています。

林業×福祉

飯島ツリーサービス

山梨県南巨摩郡身延町和田2099-1

社会福祉法人さかき会

みらいコンパニー

山梨県南アルプス市宮地1143番



活用が困難だったものをとことん活用 困難な状況を販売機会に変える発想の転換

社会福祉法人さかき会みらいコンパニーでは、定員37名の多機能事業所を運営しており、そのうちの就労継続支援B型事業で薪の販売を行っています。主な顧客は、薪ストーブユーザーやキャンプ場、そして近年増えてきている個人キャンパーなどで、アウトドアショップやウェブサイトを通じて販売しています。

ももとはしいたけの原木栽培をしていましたが、山梨県の森林総合研究所からの提案を受け薪の販売に着手しました。同研究所から紹介を受けた林業業者から材を仕入れ加工を行いはじめ、現在では4社と取引をしています。

この4社に共通しているのは木材を扱っているということと、主たる事業では使いにくい木材が発生するという事です。規格外であったり、産廃業者に処理を委託していた木材を薪として再活用することで、材を無駄にすることなく消費者にも喜んでもらうことができています。

仕入れた材を薪にするために、職員がチェーンソーで切り分けた材を、利用者が薪割り機を用いて加工していきます。また燃えやすくするために薪を乾燥させる必要があり、井桁に積み上げる作業も利用者が担っています。



連携の概要

- ① 加工することで商品化
- ② 材を活用し販売につなげる

みらいコンパニーが薪材にしているのは林業業者では活用が難しかったものです。その材を加工することで薪としての価値付けを行い、消費者に届けています。

徹底した再利用の姿勢は薪への加工時に発生する木くずやおがくずを消費者に無償で提供していることにも表れています。薪として利用できない規格外の品を詰め放題商品として販売するなど、廃棄する材をなるべく少なくしようと取り組む姿勢は林業業者から高く評価されています。また、単なる加工販売ではなく、通常の配送業者が行わない薪棚への納品を実施するなど消費者に寄り添う販売姿勢を堅持することで需要が増え、結果的に林業業者からの仕入れが増加するという好循環を生んでいます。消費者への丁寧な対応がきっかけとなって、別荘の除草など簡単な請負を依頼されることもあり、林業業者との連携を起点に事業が展開されています。

連携の課題とその対応

出荷までの一時保管場所と配送コスト

薪を出荷する前に乾燥させるスペースが必要です。また納品を利用者や職員が行うことでコストを下げるができていますが、一時保管場所を確保することや配送を行うことで生産量を上げにくい状態になっています。割安の未乾燥薪として販売するなどの工夫を行っています。

材の調達

薪ストーブや石窯の燃料として継続的に利用してもらいやすい商材であることによって、需要を満たすための材の供給が追いつかなくなることができています。材の調達に向けてより一層の連携を模索しています。



薪割り機を用いた加工



配送の様子



薪の原材料となる高木伐採の様子

今後の展望

飯島ツリーサービス 飯島陽一氏

当社は樹木の伐採専門業者です。以前は作業後の木は廃棄するケースが多かったのですが、みらいコンパニーで薪の製造販売を行っていることを知り、薪の原木材として活用できないかと思いをかけさせていただきました。

当社の主作業は庭木等の伐採ではありますが、仕事の依頼が少ない時のためにも、今後は薪山(広葉樹山林)を確保し管理しながら薪原木の安定供給が行えるよう、検討したいと考えています。



みらいコンパニー 横内幹氏

さらなる材と生産量の確保が課題となっています。そこで山梨県の県有林課とも協議しながら、事業所が材を伐採することから取り組むことができるような方法を模索しています。材の活用だけではなく山の保全にも取り組むことでより一層社会的な意義のある作業を提供できるのではないかと考えています。

また、薪ストーブが設置されている別荘の所有者は高齢化してきており、難しくなってきた建物管理を請負として実施していくことにも取り組んでいきたいです。



創意工夫が道を拓く

難しいことはあって当たり前、材の活用を諦めずに市場に提供するためのチャンスに変えていくといった工夫が随所に見られる実践です。配送や割安販売などの取り組みは消費者にとっての利便性の追求というだけにとどまらず、利用者と消費者の交流機会とも位置づけられており利用者の意欲喚起にも寄与しています。

林業×福祉

株式会社フォレスト西川

埼玉県飯能市阿須523-1

社会福祉法人おぶすま福祉会 飯能事業所

埼玉県飯能市芦荻場570-1



木が利用者さんの力を引き出してくれる！ 製品に活かされる高い技術の背景には丁寧な個別支援が

飯能事業所は、2006年10月に就労継続支援B型の指定を受けた事業所で、主に重度の知的障害者を支援しています。1997年開所当時は軸になる仕事がなく「地元の特産品である西川材を使った商品開発を」と考えて林業との連携を模索していました。最初はうまくいかず、西川材を手に入れることすらできなかったそうです。

「利用者がありとうと言ってもらえるような製品づくりを…」、西川材を調達するためのツテを作るべく開拓を続けながら、利用者の能力を活かす方法を考え続けました。

転機となったのは、OBUSUMAプロジェクト、仕掛けたのは、県農林振興センターの担当者でした。林業の補助事業を活用し地域材利用開発の助言を受け、家具作家の高村徹氏、デザイナーの河東梨香氏らとのコラボレーションを行い、家具作りに取り組みました。異業種のコラボレーションの結果、地場産の西川材と、利用者の能力、プロのデザインがひとつになった椅子やテーブル、収納家具などのOBUSUMAブランドが出来上がりました。なかでもツールは、ウッドデザイン賞木製品分野のソーシャルデザイン部門で入賞。高い技術が評価されることとなりました。

連携の概要



Point!

- ① 福祉施設だから…と妥協しない品質の追求
- ② 他業種のプロとのコラボレーション

OBUSUMAプロジェクトで得られた他業種との協働関係はさらなる展開を生んでいます。材を仕入れている株式会社フォレスト西川とも、付加価値をつけた積み木の制作販売を企画するなど、新たな連携を模索し続けています。ここでもデザイナーの河東氏に包装デザインを依頼し、消費者の目に止まりやすくするような工夫がなされています。

連携の背景には、品質を追求し続け、他業種とも積極的にコラボレーションを行っていくという法人の姿勢があります。また、利用者の得意なことを伸ばすという支援のあり方も重視されています。

連携先から評価されている製品の品質は、作られた製品の磨き上げに見て取れます。通常表面部分のみを磨き上げることが多い木製家具ですが、OBUSUMAブランドではすべての面を磨きあげる丁寧さが特徴、ひとつのことに集中して長時間取り組めるという利用者の特性が活かされています。

連携の課題とその対応

量産化の難しさ

丁寧に作り込まれた家具は既製品にはない良さがあります。一方で、利用者の生活を支える支援を行うことや、利用者の体調によって作業が進められないこともあります。繰り返し支援を行い、集中力・持続力を高めるとともに、利用者一人ひとりに合った方法を探っています。

商品開発と品質管理

利用者が自尊心を持てるような仕事を生み出すという観点から自主製品の開発を行っています。高い完成度を維持するためにも品質管理が不可欠です。より多くの利用者に携わってもらえるように治具を考案しています。



ウッドデザイン賞を受賞したスツール



スツールは組み合わせることでコンパクトに収納できる



様々な治具で利用者の作業をサポート

今後の展望

株式会社フォレスト西川
代表取締役社長 原昌彦氏



利用者の方々の工賃に貢献するためには、どのような方法が良いか考えていました。施設の考え方としては、一方的に“協力してもらおう”のではなく、対等な位置にいることを望んでいるということを知りました。それぞれの思いを遠慮することなくお互いに出し合って製品開発を進め、双方にとって良い“取引”をしていきたいと思っています。

社会福祉法人おぶすま福祉会
業務執行理事 坂本美津子氏



西川材を通してお世話になっている会社と更なる連携を図っていきたいと思っています。利用者が持っている技術をお伝えしていきながら、アイデアを出し合って作り上げていける製品もあるかと思っています。異業種だからこそ、生かし合えるものがあるはずなので、そこを探りながら製品販売に繋げていければと考えています。



利用者の持つ可能性を諦めない！

すべての取り組みの背景に、利用者自身や家族の持つ諦めの気持ちを払拭したいという強い思いがありました。商品に合わせて利用者の作業を決定するのではなく、利用者の得意なことを元に商品開発を行うという視点があったからこそ、素晴らしい製品ができたのだと言えます。

林業×福祉

宮川森林組合

三重県多気郡大台町江馬316

社会福祉法人 大台町社会福祉協議会

ジグソー工房

三重県多気郡大台町下真手1301-1



環境保全を通して地域が一体になる取り組み 木を育て、森を再生する活動

社会福祉法人大台町社会福祉協議会では、苗木の生産を行っています。大台町は面積の90%以上を森林が占める林業が盛んな町です。また、平成16年度に台風21号によって大規模な地すべりが発生するという被害に見舞われた町でもあります。台風被害を契機に、それまでスギやヒノキといった経済性の高い種類の樹木を中心とした植樹から、地域で自生する樹木を中心とした環境林を育てるための植樹にも力を入れるようになりました。この活動は地元の林業業者からなる森林組合が中心になって進めており、ジグソー工房

ではその苗木（地域性苗木）の生産を受託しています。

ジグソー工房の利用者は18名、主に知的障害者が通所しています。地域性苗木の生産は、森林組合が提供する育苗のためのスペースで実施し、山から引いた水を散水するための装置の管理や台風などの気象状況に合わせて鉢植えを安全な場所に移動させるといった作業を担っています。

苗木の成長には短い樹種でも4～5年かかるといいます。長い時間がかかりますが、地元の森林を再生させ、災害に強い環境を作る事業に携わっています。



Point!

- ① 町をあげての
取り組みへの参画
- ② イベントを通した
地域住民との
関係作り

連携の概要

苗木の生産には年単位の時間がかかります。生育途中で枯れてしまうものもあり、試行錯誤をしながら取り組みを続けています。森林組合からはスペースだけではなく、獣害を防ぐためのネットとそれを保持する躯体、散水装置などの提供を受けており、樹種の選び方や日々の世話の方法などの技術指導もお願いしています。

また、森林組合だけではなく地域住民の支援も受けています。利用者や支援者の対応が難しい曜日や時間帯には地域の方が率先して苗木の管理を手伝ってくれるとのこと。地域のお祭やイベントごとにジグソー工房が参加し、苗木の生産過程で発生する植樹に向かない苗木を用いたミニ盆栽などを展示販売していることから、その活動内容や取り組みについて理解が得られているのだそうです。

連携の課題とその対応

短期間での達成感の得にくさ

苗木の育成には長い時間が必要なことから、日々の変化が感じにくく、達成感を得ることが難しくなってしまうことが課題です。ミニ盆栽の展示販売や地域の方との交流を通して達成感が得られるよう工夫しています。

管理方法や技術向上の難しさ

苗木の管理については実施したことの効果がすぐに表れるわけではないことから、試行錯誤することそのものが難しいです。プロの指導を受けながら取り組んでいますが、技術の向上が課題です。



苗木育成の様子



育ちはじめた苗木



利用者の作業風景

今後の展望

宮川森林組合 林業振興2課
杉浦明伸氏



ジグソー工房様には平成26年より苗木の生産にご協力いただいております。

地域性苗木を活用した将来的に価値のある森林を引き継げるように林福連携で取り組みたいと考えております。

今後、地域性苗木の使える場面をより増やすことによって、ジグソー工房をはじめ苗木生産協議会の会員様・森林所有者様に利益を還元できるように努めるとともに、森林の保全と地域の活性化に取り組んでいきたいと考えています。

ジグソー工房 所長
中井千賀子氏



最初、森林組合から苗木の話をいただいた時は、初めての取り組みでもあり不安でしたが、組合からの技術的援助を受けることにより、スムーズに事も運び今では利用者さんと職員の二人三脚で苗木を育てています。今後は樹種を増やしていく中で、少しでも森林の再生を促進し「住んでよかった。ずっと住み続けたい。」と思える自然豊かなまちづくりに貢献していければと思っています。



地域課題への取り組み

自然環境の再生という大きな課題に取り組まれています。地域にとっても、社会にとっても意義の大きな活動に、障害福祉分野も携わることができることを示す好事例ではないでしょうか。

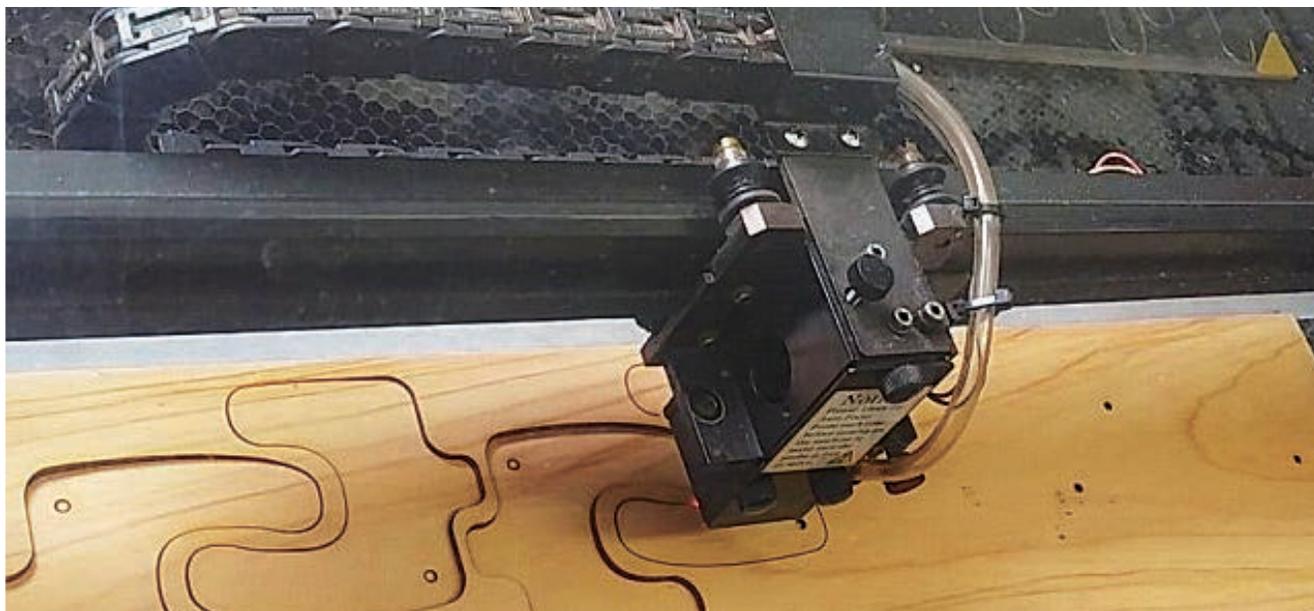
林業×福祉

一般社団法人 岡山県木材組合連合会

岡山県岡山市北区錦町1-8

社会福祉法人 吉備の里 希望

岡山県加賀郡吉備中央町上野2320-10



岡山県産ヒノキにさらなる付加価値を！ コロナ禍で生み出した感染予防グッズで日本中に安心を届ける

岡山県の中央部に位置する吉備中央町を拠点とする吉備の里希望は、約40名の利用者が通う就労継続支援B型事業所です。岡山県産ヒノキを使用した木材加工品を製造しています。デザイン、設計、加工、販売まで全て事業所内で行っています。

取り組むきっかけとなったのは、10年ほど前に「クリエイティブな新しい作業をつくりたい」という思いでした。レーザー加工機を導入し、アクリルや木材の加工をスタートさせました。

その後は「おかやま木材フェスティバル」(岡山県木材組合連合会)に出店、クラウドファンディング「美作絵」循環利用プロジェクト(木の国美作推進協議会)の返礼品に採用されるなど、木材関係者とも積極的に交流を図っています。

「ウイルスの“ウ”の形をした新商品」

新型コロナウイルス感染拡大の影響でイベント販売ができず作業量も激減。新たにできることを模索していたところに、接触感染予防グッズ「ウイルスブロック」の制作にたどり着きました。

連携の概要

Point!

- ① レーザー加工技術の高さ
- ② 大量発注にも対応

岡山県木材組合連合会との連携のきっかけとなったのは、連合会が主催している「おかやま木材フェスティバル」のチラシを希望の職員が偶然見かけたことで、自社木工製品をイベントで販売させてもらえないか、と営業を行ったことからです。

その後、イベント販売だけでなく、連合会のノベルティ制作を大量に受注したり、レーザー加工機を持っていることで連合会に加盟する企業や団体から、そして岡山県からも様々な注文をいただけるようになりました。

コロナ禍で生み出したウイルスブロックでも岡山県産ヒノキが使われています。また利用者が1つ1つを丁寧に磨き仕上げている点が強い共感を呼び、テレビ、新聞等に取り上げられ、県内はもとより全国から注文が来ています。1個200円という購入しやすい単価も功を奏し、すでに5,000個を超える販売数となっています。

連携の課題とその対応

製造キャパシティの限界

レーザー加工機が1台のため、すでに1日13時間稼働させていても製造が追いつかないことがあります。そのため、営業活動や商品開発が止まってしまっています。さらに1台導入することで生産性が向上し、製造時間の捻出が可能だと考えています。

さらなる販路拡大の必要性

連合会や関連する企業・団体からのご注文だけでなく、現在の社会情勢においてはより多くの販路を獲得しておくことが必要です。

そのため、自社ネットショップをオープンすることで、第2の大きな販路として育てていくこととなりました。



大ヒットのウイルスブロック



ご利用者の丁寧な作業が高品質の鍵



施設外観

今後の展望

岡山県木材組合連合会
会長 田中信行氏



岡山県は、ひのき生産量日本一を誇っています。また、長年培った国産材の製材技術や乾燥技術により製作された製品は、国内外で高い評価を頂いています。私達はこうした木材製品の普及・啓発を図り、利用の拡大を推進しています。

これまで、吉備の里希望さんで製造された木製ストラップなどの普及啓発資材を活用して、県産ひのきをPRしてきました。今後も、県産材を使用したものづくりに力を入れて頂き、林業と福祉が連携して、ひのきの魅力を消費者に伝えていきたいと思っています。

吉備の里 希望
所長 山崎弘一氏



これまで、岡山県木材組合連合会様には、細やかなバックアップを通じ、製作のヒントから販路まで多くの御助言と御指導を頂いて参り、感謝申し上げます。

今後も変わらぬ林業と福祉の連携をベースとし、「林福連携×教育」、「林福連携×伝統」、「林福連携×地域づくり」等、新たな価値の創造を目指し、活動展開を図ります。

併せて、SDGsに取り組む企業と連携し、持続可能な社会づくりにも積極的に取り組み、障害者の「支えられる側から支える側へ」の転換を多業種の方も巻き込み仕掛けていきたいと考えています。



発注元が安心して任せられる質の高さと柔軟さ

レーザー加工機を扱う技術力が高いことで、クライアントの幅広いニーズに応えています。また大量発注に対しても、できない、ではなく、できるためにはどうしたら良いか、という柔軟な考え方が事業所に浸透していることで、多くの連携を生み出していると考えられます。

林業×福祉

連携パートナー＝守秘

合同会社就労さぽーと 就労さぽーと岐阜

岐阜県岐阜市高砂町3-1アルソリエート岐阜高砂1F



企業と協働で事業所を設立

高単価かつ豊富な作業量で安定した給与原資を確保

就労さぽーと岐阜は令和2年3月に菌床しいたけ栽培を実施している企業との協働で、収穫されたいたけの出荷作業を担うために開所されました。それまでは企業内で出荷作業を実施していましたが、生産量に対して出荷作業が追い付かず、収穫後、冷蔵庫で保管しなければいけない状況になっている企業からの相談を受け、需要の多い顧客近くにA型事業所を設立し、収穫されたいたけを冷蔵庫保管することなく顧客に届けていく仕組みを構築することになりました。

開所後、出荷作業量は安定してあるものの、利用者が集まらず、当初計画していた出荷量を確保することが困難な状況が続

きましたが、開所後数か月経過して利用者も集まりだし、安定した量を出荷できるようになってきました。

作業料金も20円/パックと1時間の作業で最低賃金以上の収入を得ることが出来る単価で契約しており、今後、利用者数の増加に伴い作業量が増えることで、売上を上げていくことが十分期待できます。

連携の概要

 Point!

- ① 企業連携で豊富な作業量を確保
- ② 最低賃金以上の高単価で契約

代表のネットワークから菌床椎茸栽培を実施している企業の『困っている事』を把握し、困り事を解決するためのプランを企業に提案することで事業所設立に至りました。就労支援事業所にとって確実な受注量が見込める業務があることは安定した事業所運営をしていくためには重要なポイントです。仕事を確保したのちに事業所を立ち上げる事で、開所当初から安定した業務を確保することに成功しています。

また、受注単価も企業で出荷作業を実施しているパート職員の1時間作業量をもとに算出しているので、支援者が1時間作業をすれば最低賃金以上を十分確保できる単価となっています。

連携の課題とその対応

利用者確保と生産量のバランス

企業から安定した受注量を確保してから事業所を立ち上げた為、利用者が集まるまでは企業から依頼された作業量をこなすことがとても困難な状態でした。最低賃金以上の単価で請負っていたため、利用者が集まるまでは支援者が作業を実施することで一定の収入を確保することが出来ました。

生産性向上

支援者が実施して最低賃金以上の単価で受注していますが、利用者全員が支援者と同等の作業量を実施できるわけではありません。今後、利用者1人1人の生産性を向上させていく取組みがより必要になってきます。

しいたけ選別作業風景



商品



パッキング作業



商品のイメージ



今後の展望

藤田代表



今後、連携企業で実施している出荷作業をすべて事業所で受注していきたいと考えていますが、そのためには1事業所では難しいので、生産性を向上させる作業工程や支援方法を確立させたのち、事業所展開をしていきたいと考えています。椎茸の選別作業は機械化が難しい工程となっています。そこに障害者が活躍できるチャンスが多くあると考えていますので、利用者が選別作業に従事していくことが出来るような支援方法や環境整備を考案していきたいと思っています。



あらゆるところに繋がりを持つことがチャンスを生む

福祉とは全く関係のない業種(今回は菌床椎茸栽培)にもネットワークを持つことで生まれた企業連携モデル。普段から、様々なジャンルの業種のコミュニティに属し、ネットワークを構築することで新たなチャンスが生まれた好事例です。

林業×福祉

株式会社西粟倉・森の学校

岡山県英田郡西粟倉村長尾461-1

特定非営利活動法人じゅ〜く プラスワーク(就B)

岡山県英田郡西粟倉村大字影石895



ローカルベンチャーのものづくりを支える！ 事業創出の“マスト”パートナー

岡山県西粟倉村は人口約1,500人が暮らし、村の面積の約95%が森林に覆われています。持続可能な地域づくりのために、林業の六次産業化や移住、起業支援など、様々な施策に取り組んできました。株式会社西粟倉・森の学校では、間伐材等の地域資源を活かした商品開発や販売を行う会社として2009年10月に設立されました。大手企業の工場跡を活用した木材加工工場を持ち原木の調達から製材、乾燥、加工から販売までをワンストップで行っています。

NPO法人じゅ〜くは、森の学校とともに地域活性に取り組んでいた村役場の職員が独立し立ち上げた法人です。設立当時、村には就労支援を行う事業所がありませんでした。村で働くという選択肢を生み出すこと、また西粟倉で起業したものづくりベンチャー企業に対して、製品化に係る様々な作業の受け皿となることで応援したいという思いから設立に至っています。現在は就労継続支援B型、相談支援、放課後等デイサービスを村内で展開しています。



連携の概要

- ① 協働前提の事業開発
- ② 両社で利用者特性理解

じゅ〜くは木材加工工場内で加工された木工製品のパテ埋め等を施設外就労で行っています。工場内にはじゅ〜くの専用作業場が設けられ、作業が必要なもの、作業完了したものについて設置場所が明確に決められているため、日々の受発注と納品が自動化されているのが特徴です。

現在では、森の学校の新規事業開発プロセスからじゅ〜くが関わっており、どの業務が利用者に任せられる／任せられない、ということを両社で精査しています。

森の学校は、じゅ〜くとの連携を前提に業務を設計しており、人をどう確保するのが常に課題となる地方での事業創出において、福祉事業所との連携が人材不足を補う重要な手段であると位置づけています。

連携の課題とその対応

柔軟な判断が求められる作業等への対応

森の学校としては、山中での伐採作業のような、危険性が高く重大な事故が起こりうる作業や迅速かつ柔軟な判断が求められる作業については森の学校の職人が行うこととしています。

じゅ〜くへの委託作業については、日々作業があること、緻密さや丁寧さが求められること、納期が柔軟であること、という視点から作業を切り出しています。

より密なコミュニケーション

利用者の人数に対して受注作業量が多くなる場合、職員も含めて非常に多忙な状況が続きます。一方で、作業量やオペレーションが安定してくることによって、連携している両社間のコミュニケーションが減ることがあります。日々、利用者のできることや得意なことがアップデートされることで職域拡大も考えられるため、安定しているタイミングこそコミュニケーションの質を高める必要があります。



木工加工場内にじゅ〜く専用作業場があります



1つ1つの節を手作業で埋めていきます



丁寧に埋節、パテ埋めされた商品

今後の展望

株式会社西粟倉・森の学校
代表取締役 牧 大介



私たちは「人と地域の可能性を信じて諦めない」という思いを持ち、人の手と地域資源の組み合わせで価値を生み出すことを目指しモノづくりに取り組んでいます。可能性を探し出すことで、新たな価値創造のプロセスが生まれ、それらが連鎖し、本来の価値が見い出され、引き出されていきます。じゅ〜くさんとの連携は、利用者さんという素晴らしい人材が地域資源と出会うことで、まさに新たな価値を生み出していると感じています。

特定非営利活動法人じゅ〜く
理事長 大橋 平治



当事業所を立ち上げる構想段階から、様々な意見交換と試行錯誤を重ねてきました。エーゼロ様との連携事例にも寄稿させていただきましたが、人口1,500人の小さな村の中で、企業が必要としている作業と、利用者の可能性と掛け合わせ、最適な連携を生み出していくということと一緒に考えられる関係性は大変ありがたいと思います。今後も連携によって様々な仕事を生み出すことで、利用者の可能性を引き出していけると考えています。



双方なくてはならない存在という信頼関係

人材が豊富な都市部と比べ、多くの地域では人材不足が故に事業展開が思うように進まないということがあると思います。その課題を解消するにはギブ&テイクという一方通行の関係性ではなく、双方の事業に相互に必要し合える関係性構築が重要です。

林業×福祉

有限会社世羅きのご園

広島県世羅郡世羅町田打413-6

社会福祉法人つつじ 生活介護事業所 コスモス

広島県東広島市西条町西条50-1



多様なネットワークの中から、 作業種の豊富さと工賃原資を確保するために新規事業に着手

(社福)つつじは生活介護と就労移行支援の多機能型事業所として活動をしています。就労移行支援事業所に通所する利用者は一般就労を目指し日々訓練を実施していますが、2年間という有期限の中で全ての方が一般就労につながることは難しい人が増えてきているため、もう少し時間をかけて一般就労を目指していくことが出来、その間もしっかりと工賃を支払うことが出来る仕組みを法人内で立ち上げる必要性を感じていました。法人全体で、障がいがあっても従事可能であり、しっかりと工賃原資を確保することが出来る事業を模索する中、理事長のネットワークから世羅きのご園を紹介してもらった事になりました。

菌床でのきのこ栽培は様々な作業工程がある為、利用者各々の障害特性にマッチした業務を切り出しやすかったこと。世羅きのご園もきのこの栽培ノウハウを大々的に広げるのではなく、生産慮を増やしていきたいという互いの利害が一致した為、2019年度より菌床での松なめこ栽培に着手。

現在では世羅きのご園が有していた販路への販売に加え、独自で獲得した販路への販売も開始し、売上を伸ばしてきています。2022年度には松なめこ栽培を新設するB型事業所に移管し、高工賃を支払いつつ一般就労を目指していきます。

連携の概要



- ① 専門的な
ノウハウを持った
企業との連携
- ② 行政との連携

松なめこという希少食材を栽培している一般企業と連携し、栽培に必要な環境整備(栽培ハウス建設時には世羅きのご園がすべてを監修してくれる)や優良な菌床、栽培ノウハウを提供してもらう事によって、松なめこの栽培に成功しました。また、栽培ハウスを建設する際には、法人の活動に共感してくれる地域の方たちから土地を長期間貸してもらう事が出来るなど、地域住民との連携もポイントです。

販路に関しては、世羅きのご園が一定量を買上げてくれる他、行政から様々な販売先の紹介やイベントでの販売を後押ししてくれたことで、売上が順調に伸びてきています。

現在、さらなる販路拡大を目指し、事業所周辺飲食店や学校給食、仲卸業者への営業活動を積極的に実施しています。

連携の課題とその対応

販路開拓

松なめこという希少食材であるがゆえに、認知度が高くなく販路を拡大していくことに課題を感じている。地元スーパーや学校給食など、今まで独自に販路を開拓してきたが、まだまだ生産可能量をすべて販売出来ていない為、今後さらなる販路開拓が必要になってくる。

利用者が作業に従事することの難しさ

菌床松なめこ栽培には、菌床準備・水やり・収穫・選別・出荷と様々な作業があるが、全ての作業において、都度判断が必要な作業が多く、利用者がうまく従事出来ない作業も存在している。今後作業を細分化し、多くの利用者が従事できるよう構造化やトレーニング法を考案していく必要がある。



松なめこ菌床



収穫作業



松なめこ

今後の展望

有限会社世羅きのご園
取締役会長 東山 正氏



なめこ菌の永年の育種により開発できたきのこ「松なめこ」。味と香りは絶品です。広島県の特産品として全国ブランドに仕上げたい、美味しさを笑顔に変えて安心・安全な食を未来の子供たちに届けたい思いで栽培をしております。栽培を通じて少しでも就労移行支援事業者のお役に立てればと思います栽培についての指導もさせて頂いておりますのでご連絡お待ちしております。

生活介護事業所 コスモス
サービス管理責任者 山田氏



地域で豊かで自分らしい生活を送れる。皆さんが安心して、過ごしやすい、社会参加、地域貢献ができる地域づくりに努めています。

西条松なめこの事業は、障害のある方たちの就職に向けて、また自身の力で収入を得られる環境をより作れるようにとの思いから始まり、日々、利用者の方と取り組んでおります。

今後も、地域の方や、行政、世羅きのご園様のお力添えいただきながら、安心、安全な、松なめこを栽培し、皆様の食卓にお届けできるよう、利用者さんと頑張りたいと思います。



支援の幅を広げる取組みと専門的なノウハウを持つ企業との連携

法人が実施している現状の支援に満足することなく、より多くの利用者を支えることが出来る仕組みを模索し続けた事によって、専門的なノウハウを持つ企業と出会い、互いの利害が一致したことによってなし得たモデル。また、常日頃からの地域住民との関係を良好に保っていたからこそ、土地の確保等事業開始もスムーズに進んだ。

事例集（水産業×福祉）

水産業×福祉

志摩三商会

三重県志摩市志摩町和具476-1

株式会社ALLPLUSぷらす

三重県志摩市阿児町鵜方2824-181



地元志摩市の名産品を県外・海外に流通させたい！ 立ち上げたばかりの事業所の挑戦は東南アジアの高級流通へ

B型事業所ぷらすは、2018年9月に開所した事業所で主に精神障害者を支援しています。開所当時は仕事は何もなく「地元の特産品を使って商品化したい」と考えて色々動いていました。最初は葬儀の返礼品を、と思って企画しましたが、うまくいきませんでした。

「地元では売れない・・・」

どのエリアでもそうですが、地元では当たり前でも他のエリアならとても魅力的な商品になる。だとしたときに、マーケティング戦略・戦術の基本となる「誰が何を喜ぶのか？」

ということを模索し続けました。そして辿り着いたのが「県外や海外へ流通できれば面白いのではないか？」という想いでした。

「海外へあおさを輸出しませんか？」

異業種交流会で、志摩三商会（個人事業主です）の小川さんと出会い、志摩のアオサを東南アジアへ輸出してみませんか？とお話をいただきました。志摩市出身の小川さんは通関士の資格を持っており、海外の商習慣にも精通しているとの事。早速海外輸出に向けて準備を始めました。



連携の概要

- ① 東南アジア向け商品開発
- ② 難解な通関書類の作成を志摩三商会に依頼

大阪で開催された海外商社との商談会には小川さんに同行し、当事業所で作ったアオサと一緒にPRしました。この時には商談成立とはなりませんでした。東南アジアの商習慣や商品嗜好を知る良い経験になりました（この経験がアオサの色目や海外向けパッケージの開発に繋がりました）。2018年11月、タイのサイアムパラゴンという一流百貨店で「ジャパンプレミアムフードフェア」があり、ここでぷらすのあおさが商品採用されました。これを皮切りに、2018年12月：イオンストアーズ香港、2019年1月：裕毛屋（@台湾）と、東南アジアの有名流通店舗で販売する機会が得られました。日本で販売する場合は、上品＝深い色のあおさ、ですが、海外では明るめの緑のあおさを仕入れて袋詰めしました。またパッケージも日本では上品なイメージで作成していましたが、これを、志摩三商会のアドバイスで、分かりやすい「ザ・ジャパン」風の白波・富士山・日の丸のデザインを採用されました。これが好評でした。

連携の課題とその対応

食品の輸出に関する規制等

海外で販売する際には、保健所の許可、海外向けのPL保険、商習慣の違い、送料の高さ等、食品輸出に関する規制、各国で食品の衛生管理基準と準備する書類が多く、クリアすべき課題は多くあります。しかし、パートナーである志摩三商会のご協力を得ながら、課題をクリアしていています。

品質管理の難しさ

日本と異なり、特に東南アジアでの販売は、高温多湿となり、あおさが傷んでしまう、という難しさがあります。色が変わったり、味が落ちたりしてしまうことを防ぐために、流通方法やパッケージ、封入方法を工夫しています。



作業の様子



鈴木英敬知事との写真



海外での販売風景

今後の展望

志摩三商会
小川治氏



弊社は今まで、JETROをはじめ、多くの皆様にお世話になりながら成長してきました。

ぷらす様とは、今後商品開発の面でコラボし、伊勢志摩の水産物（伊勢海老・アワビ・サザエ等々）を安心・安全な“伊勢志摩産”としてブランド化し、特に海外輸出（東南アジア中心）を目標に販売拡大を目指します。

株式会社ALLPLUS
管理者 西村憲一氏



当事業所で作られた商品を海外のバイヤーに熱心にセールスしてくださる小川さんに感謝しています。東南アジアでの日本食ブームもあり、今後も需要が見込められると思います。今後も志摩三商会さんと連携しながら新商品開発と販路拡大を行っていききたいと思います。



動き続けたからこそその「ご縁」

開所したてで仕事がない状況下においても、自分たちで「海外が面白いのでは？」との想いで、色んな出会いを求めて担当の西村さんが動き続けました。失敗も多く経験されても歩みを止めなかった。だからこそこのようなご縁に出会えた、ということは特筆すべきです。

水産業×福祉

牡蠣養殖業者様

岡山県備前市日生町

社会福祉法人旭川荘 いんべ通園センター

岡山県備前市伊部974-12



地元に根付いた地場産業をサポート！ 開所当時の基盤業務として牡蠣の養殖を支援

いんべ通園センターは、2002年に開所した事業所で主に身体・知的障害者を支援しています。

「地場産業をサポート」岡山県東部に位置する地域は牡蠣の養殖が盛んで、日生（ひなせ）、虫明（むしあけ）、牛窓（うしまど）といった名産地があります。

牡蠣の養殖で使うのが「バンガラ」と言われる、牡蠣の幼生をホタテ貝に吸着させて育てるための土台です。これは、各養殖業者様によって仕様が微妙に異なりますが、基本的には、針金を使って、ホタテ貝・プラスチックのスペーサーを

交互に組みあわせていくものです。

養殖を開始するのは、例年7月頃から始まります。その使い始める時期にあわせて、1年間、このバンガラを作り続けます。いんべ通園センターでは、現在牛窓のカキ養殖業者グループやその個人業者から依頼を受け、年間にこれを約13,000セット作り上げ、工賃の原資としています。

バンガラは約50cm×30cmぐらいとなり、大きくかさばるので、毎週250セットぐらいをくみ上げては、軽トラで運搬して納品しています。



連携の概要

① 地場産業との連携

② 地元の支援学校の実習

このバンガラづくりの作業は、もともと、牡蠣の養殖が盛んな当該地域における地場産業であり、開所当時の基盤業務として取り組んでいます。バンガラづくり専用の治具を作り、針金に貝殻とスペーサーを均等に通していきやすいように、また個人の体格にあわせて角度を変えられるような工夫を施しています。今はバンガラづくりがメイン業務ですが、牡蠣の養殖であれば、牡蠣のむき身や清掃といった他業務でも、業務請負や施設外就労の可能性を秘めているものと思われます。

また、このバンガラづくりは地場産業であり、近隣の他事業所も取り組んでいる作業であることから、地元の支援学校の実習でも取り組んでいます。丁寧さを要する仕事は、障害特性にあった業務であり、特に自閉傾向の強い方には相性のよい作業となっています。事業所に入る前から訓練できる、というつながりがあります。

連携の課題とその対応

海から離れた場所での作業

これらの作業は通常海辺で実施されることが多いのですが、事業所は山のふもとにあるため、その題材を運搬しなければなりません。

運搬には時間と燃料代といったコストが発生しますし、また、大量のホタテ貝はスペースも相当量必要となるため、工夫が必要です。

外国人労働者との共生

近年では、牡蠣養殖業において人手不足から、外国人実習生を受け入れる流れがあります。以前は繁忙期中心でしたが、年間を通じて仕事をするようになりました。その実習生への仕事提供の観点から、障害福祉への発注量も減少傾向にあります。他労働力との共生が課題となります。



バンガラ



バンガラを組み上げる治具



納品時の様子

今後の展望

牡蠣養殖業者様

バンガラは養殖の元となる牡蠣の幼生を集めるのに不可欠なものです。針金に通すホタテ貝の数は決まっているのですが、間違いがなく、丁寧に仕事をしてくれているので、とても満足しています。仕事をお願いするにあたり、特に障がい者施設だからと意識していることはありません。お互いに良い関係を継続できたらと思います。

社会福祉法人旭川荘
いんべ通園センター 長壽氏

カシャン、カシャン・・・作業室に軽快な音が響いています。利用者の真剣な面持ちとともに、独特の雰囲気があります。集中することや、他の作業が得意でないが、バンガラ作業はできるという人もいます。障害のある人の特性とバンガラ作業はとても相性が良いと感じています。いろいろな労働にまつわる情勢はありますが、今後も利用者の可能性を引き出すこの仕事を継続していきたいと思っています。



今後は事業承継も視野に

地場産業に開設当初から取り組んでおられますが、牡蠣の養殖業自体、後継者不足の問題に直面しており、今も廃業に至っている養殖業者は増えています。地域に根差した障害福祉事業所は、地域福祉だけでなく地場産業の担い手としても役割を期待されてくると考えられます。

水産業×福祉

瀬戸内市邑久町
漁業協同組合

岡山県瀬戸内市邑久町虫明4256

社会福祉法人アストラ会
atワークおさふね

岡山県瀬戸内市長船町福岡149-1



取引先増加の背景には信頼を勝ち取るための丁寧な作業 夢は地域全体の取り組みとすること

社会福祉法人アストラ会atワークおさふねでは知的障害や精神障害のある利用者が「バンガラ作業」に取り組んでいます。バンガラとは牡蠣の養殖に用いる器材で、ホタテ貝の貝殻に針金を通して作成されます。貝殻と貝殻の間にスペーサーを挟みながら針金を通していく作業で、多くの利用者にとって取り組みやすい作業になっています。

2014年の開設当初は取り組んでいませんでしたが、障害のある方にもできるのではないかと考えた職員のツテで地元漁師から請け負うことができるようになりました。

最初は限られた業者と取引をしていましたが、作業が丁寧であることや決められた納期をしっかりと守ること、納品時の接遇など地道に信頼を勝ち取る取り組みを続けた結果、地元漁師の障害者に対する認識も変化していったそうです。

今では既存の取引先から紹介していただく形で10業者との取引ができるまでになりました。水産業では外国人労働者を雇い入れて様々な作業を担ってもらっていることも多く、さらなる作業の獲得に向けて交渉を続けているとのことでした。

連携の概要



- ① 地域で親しまれている作業の採用
- ② 地域自立支援協議会の活用

バンガラ作業は、牡蠣の養殖が盛んな備前地域ではとても親しまれた作業でもあります。岡山県立の支援学校では職業訓練の一貫でバンガラ作業に取り組んでおり、支援学校を卒業後に利用を開始した利用者にとっては慣れた作業としてスムーズに従事することができるとのことでした。複雑な工程が少なく、コツコツ取り組めるところも利用者にとっての取り組みやすさになっていると思われます。

バンガラ作業以外にも障害者が取り組める作業はたくさんあるのではないかとこの観点から、障害福祉サービス事業所等の多職種協同の集まりである地域自立支援協議会にて、漁業の仕事を取りまとめる漁業の役割を知る機会を作っていきたい。

少しずつ漁港内での作業に施設外就労として携わることもできてきており、より大規模に水産業との連携を行っていきたいとのことでした。

連携の課題とその対応

窓口がないことの難しさ

業者との交渉や、障害福祉サービス事業所間での連携など共同する窓口が少ないことが課題です。瀬戸内エリアにある障害福祉サービス事業所等の多くは水産業との連携をしているため、双方が共通の窓口を設け連絡を取り合うことでより一層の連携ができるのではないかと考えています。

より多くの作業の獲得を目指して

現在バンガラは針金を通すための穴をあけた貝殻に針金を通す作業として請け負っています。貝殻に穴をあける作業や、漁港内での清掃作業等できることはたくさんあると考えています。作業獲得にむけてできることのPRを進めていきたいです。



バンガラ作業の様子



完成品置き場



納品時の様子

今後の展望

瀬戸内市邑久町漁業協同組合
代表理事組合長 松本正樹氏



牡蠣の養殖で不可欠な牡蠣筏はおおよそ25mプールの大きさがあり竹で作られています。耐用年数が約5年と短く邑久町漁協で約年間200台廃棄されています。今後は廃棄するのではなく粉碎し、バイオ燃料として5年後には再利用する事を目指しています。

廃棄筏がチップになる工程の中で様々な作業を障害のある方々にお願いしたいと考えています。



海に浮ぶ牡蠣筏

社会福祉法人アストラ会
斉藤祐一氏



より多くの作業を受注していくためには、障害のある方が実際どういった方なのかを知っていただく必要があると思います。当法人では納品にはできるだけ多くの利用者と同行してもらっており、受注先に働いている姿を見てもらえるようにしています。

障害があってもできることがたくさんあることをわかっていたくことによって、任せていただける仕事も増えてくると思っています。漁協との連携を深めていき、お互いが助けあえる関係を築いていきたいです。



仕組み化への取り組み

地場産業との連携において、共同受注の窓口があるかないかはとても大きなポイントだと思われます。地域自立支援協議会を活用し地域全体で障害者福祉に取り組んでいくという好事例だと言えます。

水産業×福祉

大衆炉端 心-SHIN

静岡県三島市芝本町12-23 サクセスビル

特定非営利活動法人にじのかけ橋 ワンルーチェ

静岡県三島市北田町7-29



地元の名産の掛け合わせ！ 付加価値をもったブランド創出で工賃アップを実践

特定非営利活動法人にじのかけ橋は、2011年に設立しました。就労継続支援A型とB型、グループホームを運営しています。

「工賃を上げたい」という思いから自主製品の模索をしていた中で注目したのが、地元の名産品である「うなぎ」と「野菜」でした。静岡県三島地域では、浜名湖に負けないほどのうなぎの産地、また箱根山麓からのきれいな水で作られた野菜は箱根西麓三島野菜として古くから全国に出荷されていました。「うなぎ」と「野菜」、これらを掛け合わせて事業

化できないかという試行錯誤から生まれたのが「うなぎ野菜」でした。

障害福祉サービス事業所が野菜を作るだけでは専門知識のある農家には敵わない、付加価値のあるブランドとして独自性を持たなければ…との思いから、うなぎ野菜としてブランディング、販路の開拓に取り組み始めました。

利用者は畑作業に従事、土に触れる作業によって笑顔が増え、不調が軽減されたりダイエットになるなど副次的な効果もあるとのことでした。

連携の概要

Point!

- ① ブランディングによる差別化
- ② 廃棄されている物の有効活用

うなぎ野菜は、うなぎ専門店が発生する骨や頭など食用に適さない部位を特殊な機械で乾燥、粉末させ肥料としたものを用いて栽培された野菜です。肥料化されるうなぎの頭や骨は、産業廃棄物として捨てられていたものです。

うなぎ野菜を企画し、うなぎ専門店に相談したところ、これまで捨てていた部位が形を変えて消費者の口に運ばれることは、生産者として嬉しいことだと声をいただいたそうでスムーズに連携ができたそうです。

生産されたうなぎ野菜は、近隣のスーパーや飲食店だけでなく、東京にも出荷しています。販路開拓の際に心がけているのは、最初に障害福祉サービス事業所であると言わないこと。継続的に取引を続けてもらうためにも、しっかりと品質を評価してもらえるように意識しています。

またうなぎ野菜を活用した商品開発など、さらなるブランディングにも取り組まれています。

連携の課題とその対応

生産力向上に向けた専門家の雇用

野菜の生産量を増加させるためには農業知識が不可欠です。試行錯誤をしながら取り組んでいますが、さらなる生産性の向上のために地元の農業大学と連携を模索するなど、農業の専門的な知識を持った職員の雇入を検討しています。

B級品の活用方法

野菜としては販売に不向きなものであっても加工品として活用することで商品化しています。ふじのくにソーシャル・グッズ・コンテストで県知事賞を受賞したうなぎやさいそうめんもそのひとつです。うなぎも野菜も余すことなく活用していきたいとの思いで商品開発を進めています。



じゃがいも収穫の様子



食育活動の一環としての作業体験



芽かき作業の様子

今後の展望

大衆炉端 心-SHIN
オーナー 岩本真也氏

当店では生産者がこだわって作った食材を素材の味を活かしお客様へ提供しております。

うなぎ野菜を使おうと思ったのは生産者の責任者であり法人副理事長の鈴木さんの農福連携そして福祉に対する熱い思いを聞き、実際にサンプルで頂いたところ味も風味も素晴らしく、また栽培期間中は農薬を使用せず栽培していたことから契約に繋がりました。今後もより一層密な関係になればと思います。



副理事長
鈴木涼太氏

現在事業所を利用している方以外にも、障害のある方はたくさんいらっしゃいます。より多くの方に働く場を提供していきたいと考えています。地元の特産品であるうなぎや野菜に携わってもらうことで地域の活性化にもつながっていくのではないかと思います。

また、うなぎ野菜を知ってもらうことで、絶滅の危機が持たれているうなぎについても関心を持ってもらいたいと考えています。子育て団体と共同で取り組んでいるうなぎについての食育活動も、どんどん拡大をさせていきたいです。



多彩な連携で地域資源を活用

うなぎという水産業と野菜という農業を障害福祉がつかない結果、新たな価値を持った製品が生まれていることが大きな特徴です。また、廃棄されていたものの再活用が商品開発の背景にあることも特筆すべきことです。地域の特産品を掛け合わせることで付加価値を生み出した好事例だと言えます。

水産業×福祉

敦賀昆布株式会社

福井県敦賀市若葉町2丁目1617

株式会社LABwel +lpppo!

福井県敦賀市公文名54-10-1



地域の産業を守りたい！ 文化の継承のためにも地場産業との連携を進めていきたい

+lpppo!は、2016年に指定を受けた就労継続支援A型とB型の多機能型事業所で、主に精神障害者と知的障害者の支援をしています。一般家庭から出る不用品の回収や清掃作業とともに地場産業である昆布の加工を行っています。

昆布の加工に取り組み始めたきっかけは、障害者の就労支援をするなかで「手に職をつけてもらいたい」という思いを持っていた津田代表取締役と、同級生の間柄であった地場産業である昆布加工会社である敦賀昆布株式会社の森田代表取締役が意気投合したのだそうです。

昆布加工は敦賀の伝統的な産業でしたが、近年は職人の引退や、後継者不足といった課題を抱えていました。「このままではおぼろ昆布という文化がなくなってしまう」という危機感もあり、昆布の加工販売を開始しました。

昆布は北海道で水揚げされた真昆布を使用しています。敦賀港に運搬された新鮮な昆布を一枚一枚丁寧に手で「かく（削る）」ことによって製品ができあがります。かく部位によって歯ごたえや風味が変わるおぼろ昆布は全国に出荷されています。



連携の概要

① 地場産業への 貢献意識

② 商工会や観光 協会とのコラ ボレーション

おぼろ昆布は敦賀昆布株式会社に納品するだけでなく、全国の物産展に出店もしています。物産展ではおぼろ昆布をかく作業を実演しながら販売しているそうで、特に海のない都道府県では飛ぶように売れるとのこと。物産展への参加は、福井県の商工会や観光協会と連携をしながら実施をしています。

おぼろ昆布をかく作業は小さな包丁を使って行う昔ながらの製法です。表面に近い部分を削ったものが黒おぼろ。酢でしめているため酸味が強いのが特徴です。最も芯に近い部分を削ったのが太白おぼろ。昆布の甘みが強く、削り取るのが難しい部位になります。利用者は無心になって取り組んでおり、太白おぼろを削るという難しい作業に携われることを誇りに感じています。

地場産業への貢献意識は、引退した職人の再雇用を行っていることにも表れています。技術継承を支援することで地域産業の活性化にも取り組んでいます。

連携の課題とその対応

生産力向上の難しさ

一枚一枚手作業で削り取るという伝統的な製法で加工を行っているため、技術の習得に時間がかかります。

おぼろ昆布の加工に関心を持った利用者には「とにかくやってみよう」ことにしており、利用者の意欲を大切にしています。

利用者のモチベーションと作業難易度

地場産業へ携わることができることで利用者のモチベーションは高く維持されています。一方で刃物を使うことの危険性や独特の姿勢で長時間作業することで腰を痛めるなどのリスクもあるとのこと。丁寧な指導を心がけ、安全に作業に取り組んでもらえるよう配慮しています。



作業風景



独特の姿勢で昆布をかきます



最も芯に近い部分を削った太白おぼろ

今後の展望

敦賀昆布株式会社
代表取締役 森田貴之氏

敦賀昆布株式



障害のある方とお仕事をして、かれこれ約4年が経過しましたが、ようやく事業が軌道に乗ってきました。最初は思うようにいかず試行錯誤を繰り返しましたが、今では一人前の昆布かき職人と呼ぶにふさわしい方が何人もいます。

彼らは健常者と比較しても遜色ないほど勤勉で努力家であると感じます。

昆布かきの担い手が減少の一途を辿っている中、彼らの成長がこの業界を支える原動力になっていることに嬉しく感じるとともに、一緒に成長していきたい所存です。

株式会社LABwel
近藤友則氏



就労支援事業所の目的は一般就労。利用者の中には「昆布加工の仕事をもっと続けていきたい」とやりがいをもって作業に取り組んでいる人もいます。そういった利用者が独立して昆布業界を盛り上げてくれる存在になってくれることが目標です。また、昆布業界をさらに活性化させていくために、引退した職人を雇用していくことは継続していきたいです。合わせて、他の障害福祉事業所とも連携して、より多くの事業所で昆布加工に携わっていきことができると考えています。



地域をまるごと活性化！

担い手が少なくなってきた地場産業を支えるということは、単に地元の文化を守ることだけではなく、その地域で生活していく障害者の自尊心を大きく向上させることにつながっていると言えます。おぼろ昆布の加工を通して、売り手、買い手、地域社会の三方良しを追求している姿勢が印象的でした。

水産業×福祉

愛知県立三谷水産高等学校

愛知県蒲郡市三谷町水神町通2-1

特定非営利活動法人楽笑 日中支援センター八兵衛

愛知県蒲郡市三谷町須田10番地68



水福×教育連携の新しいカタチ！ 地場産業の「干物づくり」は新たなステージへ

愛知県蒲郡市は、三河湾に隣した漁港が栄えた街であり、干物づくりが地場産業として根付いていました。2008年、当時「十兵衛」という事業所の開設にあわせて、近隣で干物づくりをしていた方の事業を引き継ぐ形で始めました。

当時より、地元の漁協と連携し、地元の旅館や、大阪梅田の創作和食への卸等、販路開拓に取り組んできましたが、十分な展開にまでは至らなかったと小田さんは振り返っておられます。

「地元水産高校との出会い」

このような状況下、2020年に、三谷水産高等学校の近藤先生・榎本先生と出会います。そこで紹介されたのが、三谷水産高校の学生が技術開発した「焼いた干物をレトルト化するノウハウ」です。高校ではその技術開発をしたけれども、製造・販売まで取り組むことができません。その製造・販売を障害福祉事業所が担う、という、水福連携に加え、さらに教育までもが連携するという新しいカタチを実現しようとしています。



連携の概要

① 地元の 水産高校との連携

② 市役所・ 地元商工会議所 との連携

干物の製造・販売において、難しさがあるのは「焼かなければ食べられない」というひと手間がかかってしまうことです。これを地元の水産高校による技術開発で、焼いた干物をパウチ化することが可能となりました。開封したらすぐに食べられるようになる、という点で商品としての価値は高まりました。

この取組はこれから具体化されていきますが、すでに蒲郡市役所や蒲郡商工会議所といった行政・経済団体とも連携して進めていくことが見込まれています。また、コロナ禍で職を失いつつある旅館勤めの高齢者の方々への新たな仕事提供としても期待されています。

また今までは就労継続B型・生活介護の両事業で取り組んできましたが、昨今は高次脳機能障害の利用者が増える等、利用者の方々も重度化しています。そこで、21年度以降は生活介護のみに事業変更し、その生産活動として、しっかりと工賃相当をお支払いしていく方針です。

連携の課題とその対応

同業種との合意形成

地場産業の活性化とはいえ、民業圧迫につながっては本末転倒となってしまいます。価格調整やターゲット顧客の整理等、この点を整理しつつ、主旨が地場産業活性化にあること、その延長線上として障害者の工賃保障につながることにあることを丁寧に説明して合意形成していきました。

連携の役割明確化

連携といっても、具体的には、多くの立場の参加者がそれぞれの想いを持って参画されます。それぞれのお立場や狙いを理解しつつ、役割を明確にし、責任を持って気持ちよく参画頂けるようなコーディネート能力が必要とされます。



干物づくりの様子



レトルト化する機械



干物（商品）

今後の展望

三谷水産高等学校
近藤先生・榎本先生



エビの魚醤をレストランの卵掛ごはんに使いたい、というのがきっかけで、昨年出会いました。

学生の課題研究で「地域創生班」で社会課題に対して水産高校として商品開発で貢献できないか、という話になりました。そこで今ある蒲郡市内の人的資源で、さらに発達障害等の方々の働く場所を作りたい、という想いでした。

今商品開発でアイテム数を増やしている段階です。制限やお互いのルールがある中、お互いの強みをどう活かしかあうかがポイントだと思います。

特定非営利活動法人楽笑
理事長 小田泰久氏



水福教連携には様々な可能性があります。豊かな水産資源にある、高いポテンシャルを発揮する為に、課題である担い手不足を福祉で賄う。

水産加工の仕事を細分化すれば、障害者や高齢者の仕事になり、雇用が生まれ、地域が潤っていく。そこに時代に合った商品を開発する為に若い発想を活かした教育を掛け合わせる。

水福教連携は、衰退傾向にある地方の地場産業を活性化させ、地方を創生する可能性が十分あります。



コーディネーターがカギ!

地場産業活性化には、多くのプレイヤーが参画されます。その各立場のお考えを整理し、役割と責任を整理するとともに、普段から密に連携を取って人と人をつなぐという、信頼される人間的魅力を持ったコーディネーターが、事業運営のカギと言えます。

水産業×福祉

宇和海真珠株式会社

愛媛県宇和島市和霊中町2丁目3-20

NPO法人さかえ ピアさかえ

愛媛県宇和島市伊吹町甲953-8



本物の真珠が入っているガチャガチャ!? 失敗が許されない完全品質を担保するのは利用者の職人技

海と山に囲まれたまち宇和島市。愛媛県の西南部に位置し、西側はリアス式海岸が続く宇和海に面し、東側は鬼ヶ城連峰と呼ばれる起伏の多い山々に囲まれています。開所10年目を迎えるピアさかえは、就労継続支援B型事業所として約25名の主に精神障害の方を支援しています。

連携は愛知県「水福連携マッチング事業」に参加したことがきっかけです。この事業は、地域の主力産業である水産業の抱える労働力の確保という課題と、障害者就労支援施設の抱える就労

機会の拡大や工賃向上という課題を連携を通して解決することを目的として実施されました。

宇和海真珠は1回1,000円で本物の真珠アクセサリーが入っている、と全国で話題の「あこや真珠ガチャ」に使う真珠アクセサリー加工の業務委託を希望しており、ピアさかえでは実際に製品作りを体験。相当に細かい技術が必要とされるため、幾度となくトライアルを重ねて、品質として合格点に達したことでマッチングが成立しました。

連携の概要

Point!

- ① 利用者の得意なことに目を向ける
- ② 作業に集中できる環境整備

工賃向上につながる仕事開拓に悩んでいたピアさかえにとって、このマッチング事業は大きな可能性を感じるものでした。しかし「アクセサリーづくりなんてできるのか…」手先が器用な職員がたった2個作るだけでも音を上げるほどに繊細であり、高い集中力を求められる作業に、正直利用者には難しいだろうと感じていました。

「もしかしたら、あの利用者なら…」仕事は常に丁寧。手芸等細かい作業を好み、誰もが認める職人肌の利用者に作業を試していただきました。職員の読みは見事的中、利用者の手によって、美しいアクセサリーがゆっくりと作られていきました。

懸念であった宇和海真珠の厳しい検品基準もクリアしました。当初の検品工程は宇和海真珠が行っていましたが、今では品質の高さから信頼を獲得し、全てピアさかえで行っています。

現在、全ての作業を一人の利用者が担っています。専用の作業部屋を設けることで、集中できる環境を整備しています。

連携の課題とその対応

作業が担える利用者が1人

アクセサリーの作成は、常に拡大ルーペが必要なほどに繊細です。加えて、両手にペンチを持ってネックレスの金具を外したりと、一定の力を必要とします。精神疾患の方は薬の副作用で手が震えてしまうことがあります。作業を担える方がどうしても限定されてしまうのはそれも関連しています。

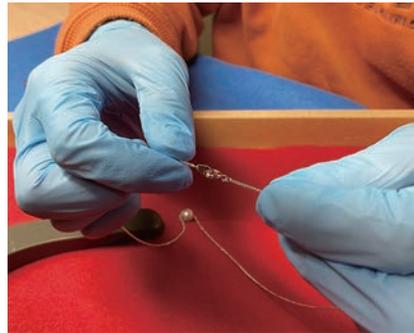
宝石を扱う以上、一切キズは許されません。できる限り多くの

利用者に関わっていただきたいと考えていますが、大変ありがたいことに発注が続いている今は、まずは品質を担保し、確実に納品することを最優先にしています。

しかしながら、作業を担っている利用者に大きな負担をかけてしまっていることは常に懸念しています。次の宝石職員を育てるための支援のあり方を模索しています。



ルーペが必要となる非常に繊細な作業



繊細ながらも絶妙な力加減が重要



事業所ではベビーリーフ栽培なども

今後の展望

宇和海真珠株式会社
専務取締役 松本哲哉氏



あこや真珠ガチャ(R)は当初、アコヤガイの大量へい死という暗いニュースを払拭し、あこや真珠を子供さんや男性まで様々な方々にお届けしたいというコンセプトで始めました。始めてみると生産が追いつかないほどに好評となり、生産を障害者支援施設様にご協力頂くこととなりました。お陰様で設置は全国60ヶ所以上となりました。(令和3年2月現在)

この御恩を忘れないためにも、「あこや真珠の振興」と「地域貢献」そして「障害者支援」をコンセプトに、これからもあこや真珠と地域の方々とともに頑張っていきたいと思います。

NPO法人さかえ
内山洸太郎氏



真珠アクセサリーの製造作業は利用者の得意なことを活かした作業です。作業難易度が非常に高く、職員も含めて誰でもができるという作業ではありませんし、また品質保持には大変気を使いますが、利用者の活躍する姿を見ていると、今回の連携は大変大きな価値があると感じています。

今後も、宇和海真珠様のニーズにしっかりと応えできるよう連携をさせていただき、長く業務を継続させていただければと考えております。



信頼し任せることで生まれた最高の職人

利用者の得意なこと、そして高い責任感に目を向けたことで水福連携という大きな可能性に繋がった好事例です。利用者に絶大な信頼を寄せているからこそ作業のほとんどを任せておられ、同様にご本人も強いやりがいを感じておられたのがとても印象的でした。

水産業×福祉

丸栄株式会社

広島市中区十日市町1-4-31

社会福祉法人

中国新聞社会事業団ちゅうげい

広島県竹原市忠海東町2-10-1



地域ならではの資源を活用した連携！ ブランド価値の高い広島産牡蠣の生産を支える

入所施設から歴史が始まった社会福祉法人中国新聞社会事業団。日中活動内容を模索する中で、水産系のお仕事をされている利用者のご兄弟から「採苗連（さいびょうれん）」の業務を紹介してもらいました。採苗連とは、針金にホタテの貝殻とビニール管を交互に通し束ねたものです。それを海中に沈め、牡蠣の稚貝を付着させる目的で用います。

重度の利用者が多くおられる中、当初は困難かと思われたこの作業も、幾度となくトライアルを重ね、時間をかけることで作業にも慣れ、今ではスピードの差はありますが全ての利用

者が作業に従事しています。平成20年に就労継続支援B型事業所「ちゅうげい」を開所した際にも、法人にとって深く馴染みのある作業として、採苗連づくりを生産活動として引き継ぎました。

現在の主な取引先は県内で70年以上の歴史がある丸栄株式会社です。採苗連を必要としている県内の水産会社を紹介していただき、年間およそ5万本ほどの安定した量の発注をいただいています。



Point!

連携の概要

① 厳しすぎない
検品基準

② やり直しが
可能な作業

作業に必要な資材関連はすべて丸栄株式会社から送付されてきます。到着したホタテ貝をサイズ毎や損傷がないかどうかを確認しながら仕分けしますが、エラー検出能力の高い利用者はここでも大活躍しています。よほど激しい損傷でなければ利用をしても良いとされているところも仕分け作業に関わることでできる利用者の幅を広げています。

また採苗連の納品可能基準は、ホタテ貝と管が交互に通されていることであるため、もしどちらかが多い／足りないという場合でも、取り除いたり追加すれば良いという点も作業のやりやすさと言えます。

採苗連は完成すると逆U字型の形状となりますが、片側40枚ものホタテ貝が連なる非常に大きなサイズとなるため、納品する採苗連は発注元まで4トンユニック車で届けています。

連携の課題とその対応

体力や力がある作業が多い

ホタテ貝をコンテナに移すことや割れたホタテ貝を集める作業等、力や体力が必要となりますが、利用者が高齢化していく中で、体力が落ちてきたときにどう対応するのかを不安視しています。職員も同様に高齢化しており、主となるかたが60歳を超えている状況です。できる限り早い段階で、若手職員に引き継ぎたいと考えています。

採苗連がどう役に立っているのか ご利用者に伝わりづらい

「これが美味しい牡蠣になるんだよ」「広島県が牡蠣生産日本一なのはみんなのおかげだよ」とできる限り伝えていきます。また定期的に沿岸をドライブし「あそこに採苗連があるね」と見える形でも共有するようにしています。



採苗連は逆U字型が特徴。
ひとつでも重量感があります



採苗連は複数束を束ねるため、
運搬にユニック車が必要



長年の作業経験から
独自の治具開発も

今後の展望

丸栄株式会社
三宅宏行氏



弊社は、牡蠣養殖産業と共に70年に亘り事業展開をしてまいりました。その事業の一環として、牡蠣養殖の採苗に必要なホタテ貝殻を仕入れ、穴明け加工をして牡蠣養殖業者に販売しております。

本来、採苗連を作る作業は牡蠣養殖業者の仕事でしたが、人手不足により委託生産も増えており、弊社もちゅうげい様に委託をして15年余りになります。採苗連は、生産量、品質ともに良く、お客様に喜んでいただいております。

今後もちゅうげい様と弊社とで連携して良質の採苗連生産、供給に携わり、末永く広島県の牡蠣養殖産業に貢献したいと思います。

社会福祉法人 中国新聞社会事業団
永見公子氏



採苗連の作業は利用者のスキルにマッチした作業であり、この仕事にたずさわることが出来て良かったと思います。事業者の一つの作業科目というだけでなく、利用者は「カキ作業が好き」「カキ作業を頑張るんよ」と自信をもって仕事に取り組んでおり、その姿勢を大切にしたいと思います。

大げさかもしれませんが、この作業を通して広島県の産業の一端を担っていると思っておりますので、これからも需要にお応えできるように丸栄様と連携していきたい、仕事を長く継続していきたいと考えています。



「この地域ならではの」価値ある提携

瀬戸内エリアならではの「海」に関連した地域資源を活用した連携です。日本中どこにでもあるモノ・コトよりも、ここにしかない、という価値に目を向けています。また、質の高い作業によって取引先の信頼を獲得し、現在の安定した業務量確保にまでつなげた好事例です。

水産業×福祉

エーゼロ株式会社

岡山県英田郡西粟倉村影石895

特定非営利活動法人じゅ〜く プラスワーク

岡山県英田郡西粟倉村影石895



「森のうなぎ」(!?) の育成・加工をお手伝い 地域経済循環の担い手として

岡山県西粟倉村は、人口約1,500人と小さな村ですが、このエリアでの起業は約40社、合計売上で20億円を超える、ローカルベンチャーで有名な村です。基幹産業は林業ですが、その林業で活かしきれていない破材等を燃料として用いることで地域循環を生み出しています。その1つが「うなぎの養殖」事業です。

エーゼロ株式会社は2015年から養殖事業を開始し、幾多の困難を乗り越えて商品開発し、できた「森のうなぎ」は翌年2016年から販売を開始、現在は2,500万円を超える売上

となり、全国の顧客が待ち望む商品となっています。

この養殖事業を、設立当初から下支えしていたのがプラスワークです。当初は「どの職域をお願いしようか?」とマッチングを思考錯誤されていましたが、今は、水槽のフィルタ洗浄とうなぎの調理加工（かば焼きの真空パック化）で業務は安定化してきています。またジビエ商品も人気が出てきているので、その食品加工も手伝う予定となっています。



連携の概要

- ① 企画段階から
プラスワークで
やってもらう前提
- ② 定期的な意見交換

エーゼロの代表である牧さんは、このうなぎの養殖事業を立ち上げるときから、「プラスワークの利用者の方々にどこをやってもらうか?」と、最初から利用者の好きなこと・得意なことを見て、職域開発されました。そのプラスワークでできない部分を近隣のパートの方をお願いする等、職域・内容に応じて、人材資源を配置されました。

特に設立当初は、オペレーションも都度変わり、それにあわせて作業指示・アセスメントも変わります。また利用者の方々の状態像や、利用者自体が変わります。このような変化にあわせて、定期的な意見交換会を設けて、その内容をすり合わせてきました。

連携の課題とその対応

さらなる意見交換・調整

事業が安定化し、オペレーションが一定確立すると、意見交換することが減るため、定期的な意見交換が減ってしまいます。しかし、状況はミクロで常に変化しているため、特に、利用者の方々ができることが新たに増えてきます。変化を見ながら適応していく柔軟さが必要となります。

新商品への対応

エーゼロでは、うなぎの担当者が商品開発で鹿肉も手掛けています。元々は鹿の解体をメインとしていましたが、ジビエ商品がヒットし始めているので、鹿肉は仕入れて、ジビエ商品を加工・販売する業務量が増えている、とのこと。食品加工も手伝えるので、新職域の設定が必要となります。



養鰻用木質ボイラ



鰻の養殖場



商品のパウチ化を手伝い

今後の展望

エーゼロ株式会社
野木雄太氏



鰻の養殖で重要なのは水質管理。この水質管理において重要なのがろ過マットの清掃を丁寧にやること。他の養殖場ではこのような作業はあまり行われていないのですが、エーゼロの養殖場ではプラスワークの利用者さんたちのおかげでこれをしっかりやれていて、小規模ながらも品質の高い鰻を生産することができます。

特定非営利活動法人じゅ〜く
大橋由尚氏



エーゼロさんが鰻の養殖事業を立ち上げる段階から、いろいろ意見交換と試行錯誤を重ねながらやってきました。小さな村の中で、どうやれば利用者の可能性を引き出し得るかということと一緒に考えていける関係があるのはありがたいですね。お互いのことを理解できているという関係から仕事を生み出し、利用者の可能性を引き出し得ると思っています。



未利用資源である障害者の働く力を活かす

少ない人口エリアにおいては、働き手も少なく、如何に活かされていない人的資源を活かすのが焦点になります。その中に、子育て中の方、高齢の方、障害のある方、いろんな方々が得意を活かして、事業構築を手伝っていく事業全体の設計力は素晴らしいと感じます。

水産業×福祉

恵比須丸

大阪府泉南郡岬町

特定非営利活動法人Re-Live

いにしき

大阪府泉南郡岬町淡輪1774



地元漁師との協働で実施!

漁師にも事業所にも高付加価値なモデルで事業を創造!!

特定非営利活動法人Re-Liveは、2014年に法人ミッションとして『町の課題をビジネスモデルで解決していく』を掲げ設立しました。就労継続支援A型・B型の多機能型事業所、放課後等デイサービス・相談支援事業といった福祉系事業だけではなく、町づくり事業として耕作放棄地を活用した貸農園事業や地域の自然環境を活用した地域ツーリズム(観光産業)等を実施しています。

法人役員は岬町出身の為、地元にも多様なネットワークを持っており、今回新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた遊漁船船長4人(小島漁業協同組合所属 恵比須丸(山原幸雄若

船長)光進丸(山原良一船長)・海蔵丸(松村船長)・海桜丸(小原船長))と連携して何か新たなビジネスを展開出来ないかと相談した結果、漁師が朝から獲った魚介類をその日の午後に顧客に直送するネット販売を開始しました。

漁師が獲った魚介類を市場卸価格の1.5倍で法人が買い付け販売することで、釣り客が減少し減収となった漁師にもメリットが生まれるようになっていきます。もちろん顧客は水揚げすぐに発送された新鮮な魚介類を手に入れることができます。また、集客にはプロファウンド(株)が運営するフクシとキナリを活用し、多くの顧客獲得に成功しました。



連携の概要

- ① 多様なネットワーク
- ② 関係者全員がメリットのある仕組

法人職員の多様なネットワークがあったからこそ実現できたビジネスモデルです。普段から様々な業種との交流を図っていたことが、今回、構想から事業開始まで数週間で実現に至った最大のポイントとなっています。また、漁師・福祉事業所・販路拡大のコンサルティングと3者がそれぞれの得意分野を活かして事業を実施したこともポイントです。Re-Liveは漁師が獲ってきた魚介類を市場へ卸す1.5倍の価格で買い付けることで漁師の所得にもつながります。また顧客も通常購入する価格よりもかなり安価に鮮度の良い魚介類を購入することができます。パッキング・発送作業を担当した障害を持った方たちにも内職作業を実施する数倍の工賃を獲得することが出来るというように関わる全ての人達にとってメリットのある事業となっています。

連携の課題とその対応

顧客ニーズに対応する魚介類の確保

販売する魚介類はすべて漁師が釣り・素潜りで確保してくる物の為、鮮度・状態は抜群だが顧客ニーズにこたえる十分な量を確保できないこともありました。また、シーズンによって獲れる魚が変化していくことなども、サンプルと違うといった顧客からの声があり、年間を通して安定した魚介類の種類・量を確保することが今後の課題です。

販路拡大

ネット販売のみでは受注量が不安定なため、今後は安定した販売先(飲食店等)の確保が必要だと感じています。

また、販路拡大に伴う必要量の増加に対応するため、協力してもらえる漁師の数を増やしていくことも必要となってきます。



朝獲れの魚を水揚げ



新鮮な魚介類セット 水揚げから24時間以内に顧客の元にお届けしています。



連携先の恵比須丸 普段は大型乗合船として大阪湾で操業しています。

今後の展望

恵比須丸
山原幸雄 若船長



元々漁もやっていましたが、遊漁船業を主に操業しています。緊急事態宣言が発令され、遊漁船も休業期間があったり、釣り客が減少し収入が減少しました。漁をしても魚価も低迷し頭の痛いところでしたが、この取組みで付加価値をつけて販売してもらうことができ、助けられました。自分たちで直接販路を見出すことは難しく、また、遊漁船操業、漁と出荷作業を行うことも時間的に難しかったため、福祉事業所との役割分担ができ、新たな収入源を見出すことが出来たことはとても良かったです。

就労支援事業所にしき
管理者 足立大輔氏



就労支援事業所が、仕事をもらうのではなく、他業種と協働して新たなビジネスモデルを構築していくことは、障害を持った方たちに高付加価値な仕事を提供していく上でとても重要だと思っています。連携先にとっても、ビジネスとしてメリットのある提案をし、社会的な要素は+αの付加価値とすることで、今まで福祉業界が取り組んでこなかった業態の中に障害があっても実施可能な多くの仕事を作りだすことが出来ると思っています。



地域内ネットワークと地域資源の活用

法人職員の日頃からのネットワーク構築に対する活動と、連携する関係者の得意分野を活かし、誰にとってもメリットのあるモデル構築がうまく機能した好事例です。

水産業×福祉

漁業関係者

三重県南伊勢町

特定非営利活動法人 ふくし・みらい研究会 ファイト

三重県度会郡南伊勢町神津佐1158-9



地元漁業者の高齢化・後継者不足を 就労支援事業所で解消！

事業所設立後、地域の方たちからの要望として地元漁業者の高齢化・後継者不足、地域活性化と地場産業を盛り上げてほしいとの要望があった為、B型事業所で利用者への作業訓練の場を提供しつつ養殖技術を学び地域や地元漁業者とのつながりを通して就労につなげていくために水産業に取り組み始めました。

地元漁業者の基地・筏を借用し協力を得つつ、牡蠣・岩牡蠣・ひおうぎ貝を養殖し出荷・販売を行っています。また事業所で加工した商品の販売もしています。

事業開始当初は法人関係者を中心に販売し、その後地域へと顧客が広がっていきました。ここ数年は看板設置やチラシ配布、牡蠣小屋の整備をした効果もあり遠方からの顧客獲得も進んできていますが、安定した集客には至っておらず、シーズン終盤に出荷出来ない貝が残ってしまうこともあります。

また、自然環境の変化に素早く対応していかなければ安定した生産を続けていくことが難しく、計画通りに養殖をする困難さも感じています。

連携の概要

Point!

- ① 漁業者からの要望で事業開始
- ② 個々に応じた作業内容
- ③ 水産技術者の獲得

事業開始以前より、地元各団体と様々な連携を行いながら地域活性に取り組んできた中で、漁業者の抱える課題を知り、その課題を解決するために養殖事業を立ち上げました。後継者がおらず使用されなくなった基地・筏を借用出来たのも、日ごろから地元各団体との関係を構築してきたからこそです。

貝の養殖は1年を通して行われ、作業内容は海上、陸上、また貝を触る作業から道具の整備、出荷作業と多岐にわたります。より多くの利用者が作業に携わることができ、それぞれの特性に応じた作業を提供することが可能となっています。

事業に着手するにあたって養殖経験者1名を支援者として迎えることで、養殖に関するノウハウを利用者が実践を通して学ぶことが出来る環境を整えました。

連携の課題とその対応

安定した売上確保

牡蠣・岩牡蠣は出荷出来る時期が限定されており（牡蠣：12～3月・岩牡蠣6～9月）、出荷時期は売上が立ちますが、それ以外の時期は収入がほぼなくなってしまいます。しかし、貝の養殖は1年を通して作業がある為、経費・人件費は必要であり、年間を通して安定した経営をしていくための売上を確保することが難しい状況です。

販路拡大

法人関係者や地域住民などへの販売を重ねて販路を拡大してきましたが、さらなる販路拡大が必要となってきています。牡蠣小屋を整備するなど、地域住民以外の顧客獲得に努めていますが、安定した顧客獲得が出来ていません。水揚げした貝を翌日には顧客の元に届けることが出来る為、今後は配送による顧客獲得を目指していきたいです。



漁師から借用した基地



海上での作業風景



養殖された牡蠣

今後の展望

漁業関係者



当初は初めての試みであり、地域外の方が参加されることもあり、不安や心配な面もありました。今では若い方たちが働く姿に活力をもらっています。

力仕事があると快く手伝ってくれたり、体調を崩したときには仕事を手伝ってくれたりとお互いに協力し合える関係が作れてきたように思います。

私が高齢ということもあり、今後もできなくなるような作業や休まなければならない状況も増えてくると思うので、今後とも助けてもらえるととても助かります。また今まで出荷してきたお客さんの注文に応えきれないときにも、協力してもらえたらと思います。

水福担当 粉川氏



地元漁業者とさらなる協力体制を構築し、安定した生産量と地域外の顧客を定着させ、販路を拡大していきたいです。漁業者には高齢者が多く、互いに助け合いながら地域活性化につなげていきたいと思っています。



地元住民の要望に応え地域活性化

地元住民からの要望に応える形で開始した事業だからこそ、養殖に必要な基地や筏を借用でき、地元漁業者との連携もスムーズに行われている事例です。また、高い専門性が必要な養殖も経験者を指導員として迎えることで、利用者が従事可能な作業に落とし込むことが出来ています。

事例集（その他業種×福祉）

大学×福祉

北海道医療大学

北海道石狩郡当別町金沢1757

社会福祉法人ゆうゆう

渋谷ダブルトゥールカフェ北海道医療大学

北海道石狩郡当別町金沢1757



お互いの困り感とできることをマッチさせ 大学内にたくさんある仕事を障害のある方が実施していく

「カフェを作りたいのですが・・・」

北海道医療大学では、平成26年4月に、10Fのリニューアルを企画していました。カフェを作って学生や先生にリラックスしてもらいたいと思う大学の気持ちと裏腹に、決まらないcafé運営先。

一方、障害のある方の働く場を常に探していた社会福祉法人ゆうゆうは「北海道にないブランドとコラボして、障害のある方が働くcaféを10Fにオープンさせませんか?」と提案。これが実現し、無事にオープンを迎えた。カフェは連日安定した賑わいをみせています。

「大学で法定雇用率を満たしたいのですが・・・」

そのcaféで働いていた障害のある方の働きぶりをみて、その方がスカウトされる形で一般就労され、大学内で用務をこなしています。

「コロナ禍もあり、支援が必要な方が多いため、A型事業所が必要。そのためには仕事を確保しないと・・・」

今度は、社会福祉法人ゆうゆうがA型を立ち上げる必要が出た時に、大学が仕事を委託し、いい人がいれば大学側で雇用につなげたいとまで・・・。

お互いの困り感とできることがマッチして、事業が広がっています。

連携の概要



- ① 利用者ニーズにあわせた事業開発
- ② 障害のある方との接点を増やす
- ③ 自然と広がる輪

10Fのcafé運営先探しに困っていた大学に対して、ゆうゆうはB型の施設外就労を活用したcaféの運営を提案。Caféは平成26年4月にオープンし、利用者2人+支援者1人で運営し、売上高は平均25万円/月前後あります。

2年後の平成28年に入ると、障害者雇用がしたい大学に対して、B型から一般就労する、という形で、カフェで働く利用者がそのまま採用されました。

さらに4年後の令和2年、今度は一般就労から、ないしはB型から望まれる形でA型を作りたいというゆうゆうのニーズに対して、大学側が仕事を提供してくれることになり、令和2年11月にゆうゆうはA型を設立しました（B型との多機能型）。

このように利用者ニーズにあわせた事業開発を実践されています。

連携の課題とその対応

お互いを知るための工夫

大学内で書類を出すときに一緒に行って挨拶する等、顔をあわせる工夫を続け、店舗も利用者も双方を知ってもらうことを心がけています。また、普通の歯学部で学生3人組が、普通に常連客となり、壁も違和感も何もなく毎日通ってくれたことが大きかった、とのことでした。

続く繋がり～東大食堂運営も～

困り感とできることのマッチングは、東大でも続きます。東大の食堂の事業企画公募があったときに、ゆうゆうでは生活介護で米や野菜を大量に生産できるため、北海道産の米や野菜を使った食堂を、という提案をし、当選。同PJの監修をしていた隈研吾氏に食堂をデザインしてもらいました。



caféで絵が得意な方がラテアートを担当



一般就労では大学用務を担当



A型ではPC活用や封入作業等を請負

今後の展望

北海道医療大学 経営企画部 人事課
西向仁史氏

雇用当初は担当職員にも不安があり、業務選定や指示方法などに随分時間を有しましたが、実際に作業を始めるとミスやトラブルも殆どなく結果に大変満足しています。

現在は教員宛て郵便物のポスティング、診療カルテの棚戻し、学生や教員が利用するコピー機への用紙補充など、複数の部門を横断し多岐の業務で活躍しており、大学にとっても欠かせない存在です。また、大学内でのニーズもあるため今後も同様の雇用者を増やしたいと考えています。

社会福祉法人ゆうゆう
山下あゆみ氏



ダブルツールカフェやそこから派生した大学への一般就労は、異なった分野の方々と創り上げ、そこから利用者の仕事生まれ、地域や企業に還元されていく流れをつくってきました。私だけではなく関わっていただいた方々にとっても、世界が広がる特別な経験になったのではないかと感じています。

現在は利用者の就労を支援する仕事に携わっていますが、障がいがある方も働く楽しさや喜びを感じ、共に働く仲間がいる職場が自分の居場所と思える場をつくっていきたいです。いずれは、社会の一員として働くことを意識できるような取り組みを実現していきたいと思っています。



地域の困りごとを障害福祉が解決

北海道医療大学は、石狩郡当別町では大手法人。そこには多くの仕事があります。大学内の人材だけでは賄いきれない仕事を、利用者の好き・得意を活かしてマッチングしていく様子は、企画力・支援力ともに優れた好事例と言えます。

地域×福祉

島田パン

新潟県村上市岩船下浜町1-3

社会福祉法人愛宕福祉会 デイアクティビティセンターはろはろ

新潟県新潟市北区早通北1丁目9-17



行政・企業・農業・製造小売業… コロナ禍だからこそ、地域と積極的に連携を！

新潟県新潟市に拠点を持つデイアクティビティセンターはろはろは、数年前に、「求人外注化」の手法を使って超大型の請負業務を受託し、大幅な工賃向上を実現させていました（＋30万円／月以上の請負収入）。しかし、このコロナ禍により、その業務が突如ストップしてしまい、新たに構築した柱となる事業がなくなっていました。

イベントや販売会も中止、施設外の作業量の減少・中止が相次ぎ、利用者・職員共に先の見えない不安に悩まされましたが、「今できることをやろう!」と活動を続けていきました。

まずは県庁若手職員有志による公民連携推進プロジェクトに参加しました。高齢化の進む県営住宅（＝買い物困難者）に、コンビニエンスストアの移動販売を持ち込んだ買い物支援と地域住民との交流、という企画に、自主製品も並べて参画させていただきました。また自主製品だけでなく、地元商店の商品も同時に販売支援する等、一人一人のやりがいや新しい発見・可能性が見られた有意義な場となりました。

連携の概要



- ① 行政・企業・
地域・福祉連携
- ② 農業・流通・
福祉連携
- ③ 製造小売業・
福祉連携

連携はこれだけに留まりません。新潟市あぐりサポートセンターという市運営のノウハウ連携推進団体から紹介を受けて、ニンジンの袋詰め作業を実施しています。施設内で複数人が携わり、内容が分かりやすい、また搬入・搬出が困難であったが、そこは流通企業がサポートしてくれるという連携が実現しています。

菓子工房でもできることを、と考え、シフォンケーキの開発に取り組みました。これも1人前サイズのカップシリーズにして、近隣のラーメン店舗や店舗にて販売してもらうことで、売上が見えてきました。

さらに、今度は岩船（新潟県北部）エリアで人気のパン屋から、委託販売の依頼を受けました。そこで、そのパンの販売にあわせて、上記シフォンケーキやマフィンの販売をすることができず。さらに注文販売にすることでロスを減らして、より確実に販路を一気に拡大できる可能性が出てきました。

連携の課題とその対応

連絡調整

例えば、コンビニエンスストアとの移動販売の取組は、行政・企業・地域商店・自社と4社間で連絡調整が必要です。そもそも関係者が多数いる中、コロナ禍で対面できない難しさがありました。また、県営住宅で販売する際の周知にも課題がありました。

基準の確認

野菜の袋詰めであれば、概ね同じ作業であっても、基準があいまいで、判断が難しい業務もありました。そこはSNSを用いて写真で確認してもらう等、密なやりとりが実現できたために、利用者のスキルアップにもつながりました。



野菜の袋詰め



新商品（シフォンケーキ）



パンの委託販売

今後の展望

島田パン
店長 菊池雅幸氏



「あなたのとこのパン美味しいよね、いつもありがとね」お礼を伝えるべきお客様にお礼を頂く喜び。欲しいものや食べたいものを買う時に不機嫌な方はおらず皆さん笑顔で購入されます。

そんな時って何気ないコミュニケーションが自然に生まれるものですね。そんな幸せな時間を福祉の皆さんと分かち合いながら就労支援事業所の工賃アップに繋がれば。先代が残してくれたこの味を心ある人たち囲まれながら、作る人も届けてくれる福祉の方々も、楽しみに召し上がられるお客様も、みんな幸せになれるパンを次の世代まで繋いで行きたい。これが私の夢です。

社会福祉法人 愛宕福祉会
ダイアクティビティセンターはろはろ
金子達也氏



私が島田パンさんの「あん生パン」と出会いその味に魅了され、いつかはろはろでも販売出来たらいいなと思い描いていたことが、先方からのご提案で実現することができました。今年度はいろいろな形で「連携」をさせていただき、福祉+aの可能性の大きさをとても実感することができました。お互いに感謝し合える関係性を目指し、今できることを精いっぱいやって利用者さんの意欲や工賃の向上に繋がってほしいなと思っています。



今できることを今やろう！

新規開拓が奏功して大きな柱となる請負業務を受注したのにコロナ禍で売上はゼロに。通常であれば動きが止まってしまっても致し方ないと思われるのですが、「今できることを今やろう」の精神で、通常から繋がりがあった所に声を掛け・掛けられ、という意識と普段からの関係性がうまく組み合わせられたものと思われます。

大学×福祉

北里大学

北海道二海郡八雲町上八雲751

社会福祉法人月山福祉会 作業所月山

山形県鶴岡市中野京田字壱柳4-1



自主事業への飽くなきこだわりは 農畜産事業の展開へ

作業所月山では短角牛の飼育に取り組んでいます。理事長の石川氏が福祉事業と掛け合わせることでできる産業を検討していたところ、近隣で牛舎が売りに出されていたことがきっかけのことです。当初、鶏の飼育にも取り組みましたが、日本各地で地鶏の生産が盛んになってきた時期とも重なり、他のブランド地鶏との間で差別化が難しく、2011年より牛の飼育に絞り込んで取り組みを続けることとなりました。

水稲が盛んな山形県は、圏域の平地の多くが水稲地帯であり、牧場は山間地に多いのが特徴です。作業所月山では夏山

冬里方式として5～10月は標高400m～600mの山麓で放牧を行い、その他の期間は牛舎で飼育を行っています。山地と牛舎を移動させることにはなりますが、放牧をさせながら飼育することで上質な赤身の牛肉となる牛を育てることができるそうです。

利用者は牧場と牛の管理を作業としており、放牧している牛が逃げ出さないための電柵の設置や、給水器が正常に動作しているかどうかの確認を行っています。牛の頭数を数えるためにドローンを使用するなどICT機器の利用も行っていきます。



連携の概要

- ① 専門家の関与
- ② 共同研究という連携の方法

作業所月山では、完全国産牧草を用いた飼育を実践しています。完全国産牧草での飼育は本州では作業所月山のみでの実践であり、行政も注目をしています。利用者家族に紹介してもらったことをきっかけに、北里大学の小笠原先生と共同で取り組むことになりました。

その過程で庄内町の保有する牧場の一部を借り受けることができ、2020年度から庄内町が保有する庄内町牧場（指定管理者受託後、愛称を月山ドリーム牧場へ）の指定管理を行う素地となりました。

5年間耕作放棄地となっていた牧場に雑草を食む短角牛を放牧することで草地の再生を行うことができるのか、牛の健康性や発育にどう影響するのかを研究者と共同研究することで、畜産ノウハウのさらなる向上と専門家との協力関係が強固に構築されました。専門家の指導を受けながらさらに高い基準である有機JAS牛の飼育に向けてチャレンジを続けています。

連携の課題とその対応

ブランド化と消費者の意識

完全国産牧草の使用や有機JAS牛への取り組みには、通常の飼育に比べてコストがかかります。安全でおいしい牛を味わってもらいたいという思いで飼育をしていますが、割高になってしまうことに対して消費者が受け入れてくれるかどうか課題です。

携われる利用者が限定的

畜産業ということで生き物や自然に触れることを好む利用者がいる反面、定型化が難しい作業が多いことや臭いによって携わることが難しい利用者もいます。限られた利用者で作業を行っていますが、今後携われる利用者を増やしていくことが課題です。



放牧している牛の様子



ドローンを用いた牛の管理



食肉加工された短角牛(肩ロース)

今後の展望

北里大学獣医学部
小笠原英毅先生



月山福祉会との出会いから3年、石川理事長や個性豊かな職員、利用者と共に月山短角牛の実現を一步步進めています。私はグラスフェッドおよびオーガニックビーフの生産から消費までが研究範囲で、月山短角牛の特性を明らかにできればと取り組んでいます。また、草だけでウシを飼養することでみなさんが何を感じられているか、癒やし効果のような食料生産だけではないウシの一面も現れるのではないかと考えています。月山福祉会さんとの取り組みが新たな耕作放棄地の利活用や農福連携のモデルとなるように今後も連携していきたいと考えています。

社会福祉法人月山福祉会
石川一郎氏



農業や畜産業を取り入れたいと始めたことがきっかけでしたが、色々な人と連携することで道が拓けてきました。現在実現に向けて取り組んでいる有機JAS牛の飼育については、消費者の意識を変えていくという大きなチャレンジが含まれています。北海道オーガニックビーフ振興協議会や北里大学の諸先生方と連携しながらこれからも取り組んでいきたいです。また、2020年度から開始した牧場の管理を通して、高齢化の進む山形県の畜産業の振興にもさらに尽力していきたいです。



とにかくチャレンジ

牧場の管理や食に関する消費者意識への取り組みなど、独創的な活動を続ける背景には大きなチャレンジ精神が感じられました。共同研究という連携方法は、より専門的な商品開発を行う上で参考になる取り組みだと言えます。

環境×福祉

ダイキン工業労働組合(JAM大阪)

大阪府大阪市北区中崎西2丁目4-12

社会福祉法人美原の郷福祉会 ワークセンターつつじ

大阪府堺市美原区小平尾953



日本に眠る都市鉱山を マイスターと共に掘り起こせ！

大阪府堺市に拠点を持つ、ワークセンターつつじは就労継続支援B型30名・生活介護30名の多機能事業所です。ここでは、使用済みのパソコン等（以下 PC 等）を回収・分解・分別しレアメタルを取り出して販売するリサイクル事業を行っています。源流は、新潟県でのんぴーりAXISが9年前に取り組み始めたのがきっかけです。担当の川田さんは、新潟の取り組みを視察し「これだ！」と確信し、6年前から事業に取り組み始めました。

日本で廃棄されている小型家電等から取れる金は年間約

6600tと言われ、全世界の埋蔵量の16%に相当します。PC等から基板を取り外し、金・銀・銅・レアメタルを取り出しますが、そのリサイクル率は95%とも言われています。これを資源に返し、国内で循環させることで、製品づくりの際に海外からの高い値段の輸入に頼ることなく、資源を再利用できます。ワークセンターつつじから出た基板・銅・アルミ・ステンレスは、大手企業に買取ってもらい、有名なハイブリッド車の部品や、オリンピックのメダルになります。その再資源化の明確さが、利用者の自尊心向上にもつながっています。



連携の概要

- ① 新潟を皮切りに
全国展開開始
- ② ゴミの「再利用・
再資源化」

当モデルは、新潟を皮切りに実施され、障害種別に応じた多くの職域があり、かつ、高付加価値な業務です。これを広めるために作られた「日本基板ネットワーク」は、今では、全国13府県52事業所が加盟され、全国でパソコン等のリサイクル事業が営まれています。ワークセンターつつじの工賃は3万5千円程、当初から取り組んでいるのんぴーりAXIS（新潟）では5万円を超えています。

仕入れに当たる資材探しでは、各エリアでPC等廃棄される企業へ営業に行きます。大阪エリアでは JAM 大阪というものづくりの組合が集まった団体と深く連携し、送料はJAM 大阪が負担し、PC 等家電をワークセンターつつじに送っています。

その営業の際に伝えるのが、役割を終えたパソコンを障がい者が解体・分別を行う事で環境と福祉の両面の社会貢献となることを伝える事で、企業側も喜んで協力しやすくなり、多くの資材が集まるようになります。

連携の課題とその対応

より良い資材の仕入れ

利用者の作業能力は、経験を積むと共に伸びていきます。よって、今後は如何に効率的・効果的な作業の進め方にかかります。PC等を多く集めるためにデータの完全破壊や、破壊証明書の発行を継続しつつ、更なる情報漏洩対策を追求しています。

利用者の苦手なことを支援

利用者の苦手なことを支援する、という支援方針に基づき活動しています。営業の説明が苦手な部分を補い、最後の熱意を伝えるのは利用者等、役割分担してものごとに取り組んでいきます。仕事に真摯に取り組む姿勢と、分解分別の作業スキルから利用者をマイスターと呼びしています。



ハードディスクの分解



作業の様子



全員で

今後の展望

ダイキン工業労組組合（本部）
清水謙一氏（顧問）



ワークセンター「つつじ」さんの支援活動を続けて、5年になりますが、組織内での活動の定着がやっと出来てきた感があります。この活動は、家庭の不要電気品が手軽に回収処理できることと、「つつじ」さんの取組で、レアメタルの再生に繋がる一挙両得に繋がる素晴らしい取り組みです。さらに、回収事業に関わる皆さんの工賃のアップに貢献する為にも、当組織としてもこの取り組みを続けていきたいと思えます。

社会福祉法人美原の郷福祉会
基板事業担当 川田康弘氏



私たち日本基板ネットワークは日本全国の障がい者施設で都市鉱山から金、銀、銅、パラジウムを掘り出し国内循環させていきます。新しい当たり前。「使用済みのパソコンは障がい者施設へ」を目指して！



地域企業と連携できる高付加価値職務

通常なら「ゴミの廃棄」として有償で処分してもらっていたものを「有価で寄付」できるとなれば、企業等の提供側も非常に依頼しやすくなります。SDGsの潮流にも乗って、この高付加価値業務は今後も全国に展開されていくものと思われます。

畜産業×福祉

本格炭火居酒屋 心

鹿児島県鹿児島市山之口町10-11 寿ビル2F

社会福祉法人ゆうかり ゆうかり学園

鹿児島県鹿児島市岡之原町1005番地



ご当地で鹿児島黒豚を育てる 畜産～食肉加工～卸・小売りの六次産業化に取り組む

「県の政策に則って展開」

社会福祉法人ゆうかりは、昭和42年創業の老舗法人です。従来は、農作業において、牛1頭が力仕事を、豚1頭が残飯処理を、というのが一般的で、ゆうかり学園においても、豚1頭を飼い始めた、ということから始まりました。昭和54年に鹿児島県の政策として「黒豚を復興させよう」という取り組みがなされ、それに賛同する形で、黒豚の養豚を開始しました。

現在は、黒豚が母豚16頭で、年2～3回、7～10頭の黒豚が生まれます。また、牛は母牛が10頭で、年に1回、子牛を産みます。

この畜産業の中で、利用者の方々は、畜舎の清掃業務や、給餌の補助、稲わらの敷き替え等といった作業に取り組んでいます。

「入所施設ならではの強み」

当然ながら畜産業は生き物が相手ですので、365日毎日手をかけることが必須です。入所施設においてシフトを組んで対応することで、毎日、変化を感じ取りながら、大切に育てることを実現させています。

連携の概要

Point!

- ① 近隣の畜産業者で勉強して修行
- ② 循環型社会とアニマルセラピー

開業当初の位置づけとしては農業補助ですが、利用者の方々があまりにかわいがるものなので、仕事にできるのでは?とあって畜産業に参入することを決めました。しかし、畜産業に関するノウハウはありません。そこで、近隣の畜産業者で勉強させてもらい、修行を重ねて、専門知識や経験を重ねてきました。

また、肉として卸していくときに「手塩にかけて育てた肉だから、よりおいしく食してもらいたい」という想いが生じ、そこで、ソーセージを開発し、さらに端肉を価値高く提供するためにギョーザを開発しました。現在は自法人の持つ小売店舗を軸にネット販売、近隣店舗への卸を実施しています。

豚を飼うのはもともと残飯を食べるため、という循環型社会の先取りです。また、動物を飼う＝アニマルセラピーの効果も持ち合わせています。

連携の課題とその対応

担い手・専門家不足

この畜産業業界においても担い手・専門家が不足しています。さらに、障害福祉事業所に属しながらその専門性や知識を積み重ねることは非常に難しいです。以前は近隣にも数件は養豚に取り組む企業・個人もいましたが、今はゆうかり学園だけが事業を継続しています。今後は事業承継も視野に入れた取り組みが必要となります。

衛生管理等のトラブル対応

過去には豚コレラが流行し、事業は大きなダメージを受けました。これに伴い、衛生管理の徹底が必要とされ、対応されています。またこれらはイノシシが伝染病を持っていると言われており、これに対応するために、行政の補助金を活用しながら、電気柵を新設する等、対応を強めています。



作業の様子



居酒屋での様子

今後の展望

本格炭火居酒屋 心
代表者 松下幸樹氏

「おいしい」と「楽しいひととき」にこだわる当店としては、地元の美味しいものを多くの方に食べていただきたいです。SDGsの観点からも当店として福祉と連携しつつ鹿児島の良いものを発信していきたいです。お客さんへのメニュー説明時にもストーリー性があり喜ばれています。

社会福祉法人ゆうかり
理事長 水流源彦氏

今後、加工部門の工場拡張とHACCPに準拠したJFS-B規格の取得を目指しています。美味しいといっただけからには、品質保証にも自信を持てるようにしていきたいです。



好きなこと・得意なことを事業に

元々は農業補助として開始した豚の飼育ですが、利用者の方々が動物を育てることが好きで、これを事業として取り組もう、という意思決定が大きなポイントです。好き・得意から開始する事業は長続きする、ということを改めて感じます。

畜産業×福祉

山辺町

山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地

特定非営利活動法人 障害者の地域生活を支援する会 サポートスクエアぱおぱお

山形県山形市円応寺町7-10



繋がりが繋がりを生む 「想い」が重なり、事業が広がる

<独立した養鶏者との「出会い」>

サポートスクエアぱおぱおでは、重度の知的障害者や自閉症・強度行動障害の方々が地域で支えるB型事業所です。国産の鶏を平飼していることが特徴で、非常に良質な卵を産むので、知る人ぞ知る名産品として、地元はもちろん、銀座の県アンテナショップでも大人気の商品となっています。

養鶏には基本3人が従事していますが、畑仕事や餌づくり等、現場に行かなくても20人全員が養鶏に何らかの形でかかわっています。広大な土地で伸び伸び育てること、それを支えている利

用者の自負心が、奏功しています。

このきっかけは、障害者と共に養鶏を通して「価値あるものを生み出したい」と独立した養鶏者との出会いでした。支援者の小嶋さんと佐藤さんは就労継続支援B型として障害を前面に出さない取り組みとして何をすればいいのかを模索し続けていました。同じ思いを持った両者が出会い、さらに365日毎日同じ仕事がある事、仕事を細分化することでどんな重度の方も携われる仕事があることから、養鶏は適職だ、と考え、共に事業を進めていくことを決めました。

連携の概要

Point!

- ① 事業に取り組む考え方が一致
- ② 一期一会で繋がる

<新拠点への移動も「出会い」>

最初是天童市で実施していましたが、諸事情があって山形市内に移動することになりました。ただそこは期限付きで借りている土地であったため、新たな場所を探す必要がありました。そこで養鶏担当者は県の畜産課に相談し、そこで人を紹介され、現在の山辺町に新たな広い土地を確保することができました。

<販路開拓も「出会い」>

また、お付き合いのあるバイヤー様の紹介で銀座のアンテナショップに卸したり、担当者の知り合いの知り合いで有名な近隣のサンドイッチ店と知り合い、そこでも卵を使ってもらう等、繋がりを見せています。

連携の課題とその対応

より重度の方の仕事切り出し

元々、重度の知的障害者や自閉症・強度行動障害の方を支援していることもあり、最近は支援が難しい方が多くばおばおに訪れます。養鶏は確かに業務を細分化することで多くの職域を作ることができていますが、今後も養鶏だけでカバーしていくことは難しいのではないかと考えています。

山でできる他仕事の探索

近くに人がいることがストレスになる方も多く、鶏を平飼いしている「山」という点に着目しています。人と人がほどよく離れた距離で出来る仕事、動物の世話(山羊や猫)は既に始めていますが、動物愛護の視点や、山自体を活かした木育、山の茶屋等々「山」を活かす事業展開を検討し始めています。



平飼いで伸び伸び育てます



ヤギも大活躍です



鳥のエサの下準備中

今後の展望

元山辺町職員
奥山健悦氏

地域の諸行事に参加してもらい元気を貰っています。
これからは地域力の維持・強化を図るエンジン役となることを大いに期待しております！

サポートスクエアばおばお
管理者 小嶋市子氏

自然の中の広々とした環境は人を穏やかにしてくれます。生きづらさを抱え「仕事なんてできっこない！」と本人も周囲の人も思っていた人たちが自分を取り戻し、自分らしく働くことができることを実感しています。

さて、この次は何をしようか？“毎日が楽しい。ここに来たくなる。ここで過ごす時間が愛しい。”そんな場所・仕事を、これからも作り続けていきたいです。



「想い」を明確化しているからこそ、一期一会で繋がりが続けられる

「おいしい、また食べたい、紹介したい」という価値があるものを生み出したい、という明確な「想い」があったからこそ、その「想い」に共感した養鶏者と連携できました。その結果、その「想い」からできた商品の価値は高く、多くの販売先とも連携できています。「想い」を明確にして発信していること、また支援者のお人柄もあって、繋がりが続けられると感じます。

生薬×福祉

株式会社夕張ツムラ

北海道夕張市沼ノ沢281

社会福祉法人はるにれの里 とれたってマルシェ

北海道石狩市厚田区聚富171-2



きっかけは思いを込めた一本の営業メール 熱心な生育指導と度重なる試験栽培で完全無農薬の生薬栽培に成功

社会福祉法人はるにれの里では1987年4月に「厚田はまなす園」を開設して以来、石狩市および札幌市において施設・事業所を必要に応じて開設、運営し、知的障害や自閉症、発達障害の人たちが地域でその人らしく生活できるよう支援を行っています。事例として取り上げるのは、石狩市にある「とれたってマルシェ」で、就労継続支援A型とB型の多機能型施設です。

「農作業を拡大しよう！」

生産活動収入増加のために事業所周辺の砂地で栽培できる農作物を探していましたが、農業経験者もおらず一向に進めることができませんでした。

そんな中、当時繋がりのなかった大手漢方薬メーカー「株式会社ツムラ」のお客さま相談室に、生薬の仕事で障害者ができる事があるかメールで問い合わせをしたところ、アポイントを獲得することが出来、生薬の契約栽培を受託することとなりました。

試験栽培では2年間で10種類の生薬栽培に取り組み、蘇葉（赤しそ）及び他1種類のみ栽培に成功しました。現在では、農地を20aから3haに拡大し栽培体制を構築。完全無農薬での栽培を実践しています。

連携の概要


Point!

- ① 連携先企業担当者の熱心な指導
- ② 利用者を迷わせない支援
- ③ 行政の高い意欲

生薬の試験栽培を開始してからは非常に困難な状況が続きました。相当量の生薬をすべて枯れさせてしまうこともしばしば。担当職員も辞めてしまった方が楽だと何度も考えたようです。しかしながら、連携先となる夕張ツムラ社の担当者が何度も現場に足を運び、生産に関する具体的なアドバイスを続けたことで、栽培に関するノウハウが蓄積し、企業が求める品質に達することができました。

農作業はその日の天候によって作業の有無が決まるため、毎日の作業スケジュール共有が必須となります。その日に行う作業はわかりやすく掲示され、また朝礼で確実に確認することで、利用者一人ひとりが自分の作業に悩まないよう配慮しています。

また石狩市は、積極的に障害者就労の場づくりに取り組んでいて、現在も、石狩市、夕張ツムラ社、はるにれの里の三者が連携し、新たな農産物の栽培によって障害者が活躍できることを目指し、共同研究事業を進めています。

連携の課題とその対応

農閑期の業務確保

3月から畑作りを開始しますが、夏季には刈り取りを終えてしまい、農閑期となります。利用者の業務量が格段に減少してしまうこととなるため、夕張ツムラ社に相談したところ、蘇葉乾燥後の選別作業を受注することとなりました。選別作業についても収入があり利用者の賃金向上に繋がっています。

品質に応えるための職員配置

法人規模の大きさ故に毎年の変動があり、職員の固定ができないことも課題となっています。本来職員の栽培技術の安定には複数年かかるため、変動の影響で栽培技術の安定を図ることは大変難しい状況です。オーダーに応え続けるために、先方栽培担当者から定期的な生育指導を受けることで品質保持をしています。



広大な蘇葉畑での作業



機械化による生産性効率化



ご利用者の手作業でも畑が整えられます

今後の展望

株式会社夕張ツムラ
取締役 菊地 原氏



一般的に薬用作物の生産は使用できる農薬が限られており、乾燥や加工にも手間がかかるため、一般の農家様に生産いただくにはハードルが高い作物です。しかし利用者の皆さまには、手除草を中心に手間暇をかけ丁寧に生産を行っていただいています。職員の皆さまには「赤（蘇葉）は抜かないで緑（雑草）だけ抜くんだよ」と細やかにご指導頂くことで、安全安心な生葉を安定的にご生産いただいています。今後ともwin-winの関係を維持し発展していきたい重要な産地です。

社会福祉法人はるにれの里
池田 秀敏氏



私たちは企業様とお取引をする際、信頼を頂くために頼まれた仕事に対して、利用者の特性から検討し、幅広く利用者が参加できるように作業を切り出して進めています。職員は作業のスキルを身につけ情報の共有を大切にしながら意思統一をしています。企業からの依頼された仕事はビジネスであり、こちらの都合を持ち出してしまうと取引は続かないと思います。これからも信頼関係を築き、期待される仕事を持ち続けたいと考えています。



ビジネスであるという意識の重要性

利用者が地域にとって必要不可欠な人財となっていくために、自社だけではなし得ない規模の大きさやインパクトのある仕事を行っていくことも重要です。そのためにはビジネスとしてシビアなクオリティを担保し、企業と行政との信頼関係を構築することが必要です。

農業×福祉

企業による起業と 就労継続B型事業所の設立

株式会社アクア 菰野辻農場

三重県三重郡菰野町大字田光23番地 1



徹底した品質管理と スペシャルニーズにこたえる為の低カリウム野菜の開発

株式会社アクアは前身となる辻石油店の農業部門として平成21年にビニールハウス4連棟の水耕栽培設備で小松菜の生産を開始しました。

農場の周りや周辺地域に一般就労が困難な障害者や社会での生きづらさを感じている方がいることを知り、その方たちが働く場を提供したいとの思いで就労継続支援事業所を立ち上げました。

平成24年に株式会社アクアとして法人化し現在に至ります。

農場は三重県北勢部にあり、鈴鹿山麓の天然水を100%使用した水耕栽培で小松菜・水菜・リーフレタス・ベビーリーフの

生産をしています。また腎疾患や透析、糖尿病などでカリウムの制限をされている方でも安心して生野菜で食べることが出来る「低カリウム野菜」の生産にも着手し、直売所での販売に加え、北勢部のJA直売所・スーパー・学校給食や飲食店に出荷しています。

減農薬、栽培記録表への記帳と廃液管理等の審査基準を満たすことで認定される「みえの安心食材」表示制度の認定も得ており、JGPAの認定も全品目で受けています。

平成30年からはJGPAの生産工程管理を用いて、障がいがある方たちも働きやすい環境整備に努めています。



連携の概要

- ① GAPを取り入れた水耕栽培で誰もが働きやすい環境整備
- ② 高付加価値商品「低カリウム野菜」の栽培で工賃UP
- ③ 一人一人のニーズに合わせた仕事とのマッチング

農場内はGAPに基づいて5S（整理・整頓・清潔・清掃・習慣）を徹底して実践しており、作業効率の向上やリスク軽減につながっています。また、5Sを実践することで利用者にとっても働きやすい環境整備につながっています。

また代表の関係者で糖尿病患者の家族から病気になると生野菜を食べることが出来ないという相談を受けた事から、低カリウム野菜の栽培に着手し、スペシャルニーズを持つ患者やその家族のニーズに応えています。また、通常野菜よりも高付加価値な為、利用者の工賃原資をしっかりと確保することにもつながっています。

水耕栽培には様々な作業がある為、利用者一人一人と丁寧な面談を実施し、それぞれの希望や特性を理解し、仕事とのマッチングを行うことで、誰もが働きやすい環境を作っています。

連携の課題とその対応

低カリウム野菜の安定生産

夏季に猛暑の為、植物病原菌の繁殖で生産できなくなってしまうなど、年間を通して安定した生産量を確保することが課題となっています。JAや農業普及センターとの連携を図ったり、他社の水耕栽培施設や野菜工場等での衛生管理方法も参考に対策を練っていく必要性を感じています。

低カリウム野菜の販路拡大

低カリウム野菜は通常野菜と比較し高価なため、通常販路（スーパー等）で販売しても中々販売数が上がりません。また、低カリウム野菜を必要としている方たちにも届いていません。

低カリウム野菜を必要としている方たちに知ってもらい、配送コストを抑えながら必要な方たちへ届けていきたいと思っています。



水耕栽培ハウス



低カリウム野菜
「Dr,ULHA」



ポットへの種まきなど
様々な仕事に利用者が従事

今後の展望

低カリウム野菜購入者からのコメント

食べるのが大好きな主人が10月に突然腎不全からの透析になってしまい、カリウム制限の食事となりました。この数か月は厳しい食事制限に主人も耐え、なんとか目標の数値まで落とすことができました。しかし、茹でこぼしてカリウム除去ができて、食感は異なるし、生野菜が食べれないのは、とても寂しそうな感じでありました。その中で、アクア様のホームページを目にして、この暮の忙しい時期とは思いながらも無理な注文をしてしまいました。

今後は、主人の好きな生野菜や食感も変わらない小松菜のお浸しや煮びたしも振る舞うことができます。本当にありがとうございます。

金谷氏



就労支援はこれからも一人一人としっかりと向き合った中で本人がやりがいをもって楽しく仕事に取り組んでいけるように支援者同士がもっとコミュニケーションをとって、全員で楽しい職場にしていきたいと思っています。

低カリウム野菜の販路拡大は従業員だけでなく、必要とされている方々にとってもメリットとなります。いろいろな角度からアプローチをし、様々な人との連携を模索し、低カリウム野菜を必要とされている方々に一年中安心して食べられるアクアの野菜を届けていきたいと思っています。



誰もが働きやすい環境整備とスペシャルニーズに対応

GAP (Good Agricultural Practice) を導入し、支援者も利用者も誰もが働きやすい環境整備を目指しておられます。また、腎疾患患者が安心して食べることが出来る低カリウム野菜を栽培し、栽培する側にとっても高付加価値、消費者にとっても安心できる食材を入手できる、winwinな食のサイクルを構築されています。

まとめ

作業アセスメント表が作り込めるか？がポイント

如何でしょうか？

多くの実践事例と、林業・水産業の職域と障害特性の相性について紹介してきました。

改めて、林福・水福を普及していくにあたっては「作業アセスメント表が作れるか？」がポイントと言えます。というのも、全ての対象物に個体差があり、一律に取り扱いづらいという特徴があるからです。

しかし、工程を細分化して、フォーカスしていくことで、十分に組み組めることも多い、と感じられます。

例として、林業・水産業で実際に作業しているアセスメント表を添付しています。これを見れば、特に林業・水産業だけに特化したものではなく、「できる部分」をうまく抽出していることがわかんと思います。

地域の困りごとを障害福祉が解決していく、というモデルづくりを是非実践してください！

【作業アセスメント表(例)：パテ埋め】

【作業名】		【評価対象者】Kさん				【評価日】2021/3/1			
No.	工程	要素作業 (秒水準)	評価項目 (任せられる/られない)	R3上期 強化項目	評価基準				備考
					できない	支援があればできる	たまにミスがある	一人でできる	
1	準備	へら、紙、布等を準備する	作業に用いる道具を理解している		1	2	3	4	
2		自分の前にユカハリタイルを置く	タイルを傷めることの無いように丁寧に扱うことができる		1	2	3	4	
3	パテ埋め作業	パテをへらにとり節穴を埋める	埋めるべき節穴がわかる		1	2	3	4	
4			埋めるのに必要なパテの量がわかる		1	2	3	4	
5			へらを使ってパテを埋めて取る手の器用さがある	○	1	2	3	4	塗りこんだ後、最後にパテを削ぐため厚くなりがち
6			パテが固まる前の一定時間内に作業ができる		1	2	3	4	支援者によっては時間がかかる
7			凸凹せず平らになっているか目で見て確認ができる		1	2	3	4	視力の問題もあり？
8			1枚仕上がった後、「できました」と報告ができる		1	2	3	4	
9			埋めにくい場合は、支援者に早めに助けを求められることができる		1	2	3	4	
10		板の継ぎ目に節穴がかかるときに汚さないよう、間に紙を挟みパテ埋めをする	紙をしっかり折り、間に奥まではめ込むことができる		1	2	3	4	分かってはいるが、奥まで入っていないことも多い
11	パレット交換	1/パレット終わった後、支援者が次のパレットができるよう準備をする	支援者の声かけに応じ、必要な手伝いをする		1	2	3	4	
12	片付け	へら、紙、布等を片付ける	片付ける場所がわかっている		1	2	3	4	
13		へらについているパテ汚れを落とす	道具を使いパテを落とすことができる		1	2	3	4	
14		机のゴミを落とし、床の掃きそうじをする	ほうきを適切に使うことができる		1	2	3	4	
15			ゴミを認識できる		1	2	3	4	あまり見えていない？集中できていない？

R3上期支援方針

塗り込み後にパテを削がないようにすることができる
→塗り込み後、パテを外で削ぐ用の台紙を準備する

【資料・ダウンロード】

研修資料・フレームワーク等がダウンロードできます。

下記サイトから、必要事項を記入の上、お申込みください。

<https://insweb.jp/works/>

令和二年度 厚生労働省委託事業

「障害者就労における林業・水産業と福祉との連携におけるガイドブック」

【発行】 2021年(令和3年)3月

【実施】 株式会社インサイト

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-8-31

【デザイン・印刷】 社会福祉法人ぷろぼの

〒630-8115 奈良市大宮町3-5-39

